

東京外国語大学 国際日本研究センター主催

国際シンポジウム

国際日本研究と日本語教育

『日本をたどりなおす 29 の方法－国際日本研究入門』:

私の活用法

日時：2019年2月22日（金）13:30～18:00

場所：東京外国語大学 府中キャンパス 留学生日本語教育センター 103 教室

13:30 開会（司会：坂本恵氏、本学教授）

13:40 第1部 使っていたらいる先生方から（各25分）

日本語非母語話者対象

- ①国内大学1 鈴木美加氏（本学教授）
- ②海外の大学 キタハラ高野聡美氏（リオ・デ・ジャネイロ州立大学准教授）
- ③国内大学2 李婷氏（日本大学助教）

<休憩10分>

日本語母語話者対象

- ④国内大学 清水由貴子氏（聖心女子大学講師）
- ⑤国内の高校 内田正俊氏（川越高校教頭）

日本語非母語話者対象

- ⑥日本語学校 池辺亜由美氏（赤門日本語学校講師）

16:30 第2部 ディスカッション（司会：伊集院郁子氏、本学准教授）

発題者 野本京子氏（本学名誉教授）

17:00 閉会

終了後、情報交換会（17:00～18:00）を予定しております。

○趣旨

国際日本研究センターでは2016年3月に『日本をたどりなおす 29 の方法－国際日本研究入門』を出版し、この教科書の作成に関するシンポジウムを2017年2月に開催しました。今回は実際に使ってくださっている先生方をお招きして、どのように使っているかをお話しいたします。使ってみての工夫や問題点などについてお話しいただければと思っています。

お問い合わせ：東京外国語大学 国際日本研究センター
電話：042-330-5794 メール：info-icjs@tufs.ac.jp



**国際日本
研究センター**
International Center
for Japanese Studies

開会_坂本恵

この、今日の会の流れは、この後、使っていただいている先生方から、日本語非母語話者対象の使い方、それから日本語母語話者にも使っていただいている例がありますので、そういう事例をお話いただくことになっています。日本語非母語話者対象では、国内大学というのは、本学で、ここで使うために開発したというところもありますので、本学の全学日本語プログラムでどのように使っているかというのを、まず鈴木美加先生に。それから海外の大学で、これも色々事例が実はあって、どなたにお願いしようかというくらい色々ご報告いただいているのですけれども、今回、リオ・デ・ジャネイロ州立大学のキタハラ高野聡美先生。キタハラ先生は、これまでも色々なことでセンターと関わりをいただいている先生でして、この本も使っていただいているということですので、今日来ていただいてお話をさせていただくことにしました。それから国内の大学のもう一例として、私がたまたま個人的にというか、学会の関係で知っている李婷先生、日本大学の今、助教をなさっている先生ですが、若い、ノンネイティブの先生が使って下さっているという話を聞いて、素晴らしいと思って、それも色々工夫して下さっているというのが分かりましたので、今日来ていただくことにしました。

それでちょっと休憩を取って、後、日本語母語話者対象として、前、センターにいらした清水由貴子先生、今聖心女子大学でこの本を使って下さっているという話をお聞きしましたので、お話をお願いしたい。それから、内田先生。川越高校の教頭でいらっしゃる内田先生は、16年にこちらに研修で来ていらっしゃるって、色々センターの活動にも参加して下さったり、この前のシンポジウムでも、高校生にこんなふうに使いたいという話を下さっていましたので、その後高校に戻って使って下さっているという事例をご紹介いただきたいと思います。

で、日本語非母語話者対象で、日本語学校でも使っているというお話がありましたので、お願いしたいと思って、赤門日本語学校で講師をしていらっしゃる池辺先生が使っていらっしゃるということで、お願いしたいのですけれども、日本語学校というのはご存じのようにとっても忙しい所で、今日も午前中授業をしてその足でこちらにいらっしゃる、それとかなり都内の遠くからなので、時間が。本当は前半でお話いただくと良いのですけれども、そういう事情がありますので、一番最後に持ってきました。そういうことでお話いただきたいと思います。

で、ちょっと休憩を取りまして、ディスカッションをしたいと思います。ディスカッションでは、この教科書を私と一緒に主に編集をいたしました野本京子氏にコメントをいただきます。このディスカッション自体はこの教科書の第6章の問題を作ったり整理を下さっている伊集院郁子氏に司会をお願いしたいと思っています。その後情報交換会として、この奥になります交流室の方で、ちょっとお茶とお菓子をつまみながら、皆さんでお話できる時間を設けたいと思っています。

今日はこういう流れになっておりますが、もう一つ宣伝をしておきますと、この教科書は、教科書として上級の教科書で使えるように、皆さんご存知のように、非常に本文が短い、短いといいますが、字数としては2千字ということをお願いして、見開き1ページで本文が収まるようにということをお願いしたのですけれども、実は、お読みになると分かると思うのですけれども、すごく膨大な量の色々な情報をギュッと縮めているので、先ほどどなたかおっしゃっていたのですけれども、行間を読む必要がすごくあって、実は、留学生にはなかなか大変な教材ではありますし、特に私たちが心配したのは、海外でこれをお使いになるノンネイティブの先生方はこれだけで教えるのはちょっと大変じゃないか、ということがありま

して、これの続編といいますか、この内容をもう少し自由に 5 千字位の量で書いていただいた本を計画しておりました。これはもう、この教科書を作る時からの計画で、両方、2 本いっぺんに書いて下さった先生もいるのですけれども、それをまとめて 1 冊の本にしたいと思っているのですが、実は、本当は今日ここでご紹介したかったのですけれども、諸般の事情でちょっと出版が遅れまして、今回間に合わなくなってしまったのですけれども、来年度中には必ず出ますので、そういうものも見たいと思っています。ちょっと、その宣伝も兼ねてこの会を計画したのですが、残念ながら本の方は間に合いませんでした。

あともう一つご紹介しておきたいのは、この本も幸い 2 刷が出まして、もうすぐ 3 回目の増刷が出るようになったのですが、第 2 刷の方の後ろには書いたのですけれども、その後教材をちょっと整備しまして、音声、本文の音声を書いて下さった先生方、それが叶わない場合には声優さんに読んでいただいた音声があります。それから各本文の語彙集も作りまして、そのアップ、実はもうしてあるはずだったのですが、手違いでまだできていなかったのですが、近日中にアップします。それから、問題の解答例も一応作りました。それも、近日中にアップする予定なのですが、解答例の方はあまり自由に見られないようにしようと思って、申し込みで、先生方が申し込んで、サイトを紹介して、という形で公開しようと思っております。そういうものもあるのですが、まだまだ整備が足りないのですが、色々使って下さるといってお話を聞いて、嬉しく思っております。それでは、これから、今お話したような順番でお話をいただきたいと思います。それでは、鈴木美加先生お願いできますか。

日本語非母語話者対象_国内大学 1_鈴木美加

鈴木美加と申します。宜しくお願ひします。本学の国際日本学研究院、そして教育としては、留学生日本語教育センターの全学日本語プログラムで主に担当しております。今日は「全学日本語 上級 1 総合での活用」としまして『日本をたどりなおす 29 の方法』の活用例についてご紹介いたします。

この発表の流れですけれども、まず授業内容についてお話しします。この教科書を使っているのは 600 レベルと 700 レベルのクラスなのですけれども、600 上級 1、大体日本語能力試験の 1 級に合格、まだしていないけれども、これからするというようなレベルの学生たちが多く受講するのですが、その 600 レベル上級 1 の総合日本語の授業内容についてお話しします。そして「発展タスク」。授業で使っていて、テキストのページに発展タスクがありますけれども、その中の 3 章の 3、国を二分する問題というテーマがありまして、それについて、資料にありますけれども、そのご紹介をします。そして 3 番、発表タスクの実際。タスクが三種類あるのですが、その三種類について例を見ながら説明したいと思います。そして最後にアカデミックな能力が学習者は変わったかということで、アカデミック・ジャパニーズの観点からも考えてみたいと思います。

まず初めに、上級 1 総合クラスの概要です。対象者が主に文科系の学生。理科系、理系の学生もちょっといます。そして、日本語・日本専攻の学生が割と多いです。ちょっとここに、ごめんなさい、書ききれていなかったですけれども、例えば国際関係ですとか、社会学、歴史、そして工学、コミュニケーションといった専門の学生も入っています。あと、委託留学生とって、専門がデザインとか美術とか音楽とかといった学生も時々います。で、年齢層ですが、予備教育段階の学生、これから学部に入る学生も少数いまして、学部 3、4 年生、一般的に一年留学するような交換留学の学生ですとか、日研究生、そして、大学院入学前の研究生、そして、ここに書ききれていないのですが、日本語の教師をやっている教師、教研究生も入っています。そのような色々な学生が一つのクラスで勉強しているというような形で、クラスとしては大体 20 人位が主になっています。20 人を超える場合もありまして、25 人位の時もありますし、15 名という場合もありますが、最近留学生も多いですので、大体 20 名位、多いと 25 名、先学期で言いますと 26 名のクラスもありました。このレベルは 2 クラス設定になっています。

参考までに全学日本語プログラム全体について申しますと、全体、100 から 800 までレベルがあるのですが、343 名が秋学期の学生数でした。そして出身国もここに書いてありますので、ハンドアウトでもご覧いただければと思います。アジア圏が 4 割強ですね、ヨーロッパ 3 割強、そして中南米、アフリカ、中東、北米、豪州というような形です。外大の特徴としてはヨーロッパの学生が多いというようなことが挙げられます。他の大学ですとアジアが、特に中国、韓国、台湾が多いというような形が多いと思います。学生カテゴリーはこちらをご覧くださいければと思います。

目標としまして、大学レベルの一般教養的な文章を批判的に読み解くことが挙げられます。この批判というのは、客観化というような、自分と距離を置いてというか、共有してあったり、自分の主観的なものとしてではなく内省的な意味も込められています。批判的に読み解き、自分の考えをわかりやすく表現する。そして、ほかの人の意見を聞き、質問やコメントをする。質問やコメントができるということは、相手のことを理解して、話していることを理解して出てくる言葉ということで、ここでは、601 ではとても大切にしています。これらにより、情報交換、共有を行い、互いの考えを深める、ということを目指に置きました。授業回数なのですが、週 3 回 90 分です。1 コマ 90 分、週 3 回で 15 週ということ。結

構密な形になっています。実際には 2 週間分のアクティブラーニングを含めますので、週数としては、実質、期間としては 13 週になっています。

そして授業内容ですが、この『日本をたどりなおす』の本の、主には前半を 600、そして後半を 701 で行っています。ただ、1、2、3 は文化的な、言語、そして文学が基本ですので、使ってみたところ、社会的なものもちょっと入れたいなということもありまして、先々学期から 6 章の 1、2 も入れさせていただいています。

進度ですけれども、大体一章には 4 つ、5 つのテキストが入っています。そのようなテキストについて 2 回分で行ってしまいますと言いますか、2 回分でテキストを確認する、そして本文質問の確認、基本タスク、発展タスクをカバーするというような形の進度です。どんどん進んでいって、その間、その一章が終わったら発表タスク、プレゼンテーションなどをするという形になっています。グループワークを中心に行いますので、予習が前提となっていて、本文の内容は予習して読んできてねという形で、本文の内容がちょっと難しいと、背景的な知識も含まれている場合には、読むのに時間がかかったというようなコメントもあります。授業の中では確認をするということをよくしておりまして、本文内容確認、①番ですね、本文内容確認をして、そしてテキスト、見ていただくと分かるのですけれども、基本タスク、本文から関連させて自分の考えですとか、あと自国の状況を確認するというようなこと、そして発展タスクはもっと発展的に、答えが一つではないというような問題が示されると言いますか、自分で用意して、クラスで 4、5 人のグループを作って、または 2 人 3 人だったりすることもありますけれども、分析、経験、そして思考を話し合うというようなことをしています。そして、②番、③番、テーマによるのですけれども、本学の日本人学生ですとか、留学生を含めた院生を迎えての交流型授業を行っています。例えば俳句とか、宮崎駿の章の交流型授業は日本人学生にも人気があって、割と毎回、1 人 2 人、多い場合には 3 人、5 人という形で授業に入っていただけるようになっています。

そして、進度ですね、発表タスク 3 種類、先ほど言いました、1 章 2 章 3 章に関連した発表タスクがありまして、その発表の手順ですけれども、タスクについての説明をまずしまして、そして発表トピックと、あと自分のトピックを決めるということがあります。例えば、1 章ですと、言語、日本語と日本語の特徴を読む章、色々な内容がありますので、それを読んだ上で、自分の言語ではどうなのかということを考えて、そしてその中の語順ですとか、語順なら語順について、日本語と英語だったり、自分の言語、よく知っている言語と対照させて分析をして発表するという形を取っています。そして、そのような発表なのですが、結構発表時間は短いです。5 分とか 6 分とか 7 分というのは、本当に研究発表でしたら、10 分 20 分あてるのは当然だと思うのですけれども、日本語の授業ということで、とても限ってしまいます。限ることによって何が良いかというと、分析が必要で、メッセージが何かということをしっかり考えるというようなことが必要で、本人、そしてお互いに考え、アドバイスし合って、それが良い影響になっているかなと思います。

そして 2 番目です。発展タスク、テキストの発展タスクのページがあるのですけれども、その中で 3 章の 3、忌野清志郎の内容を読んだ上で、「あなたの国で、日本の原発問題のように世論を二分するような大きな社会問題があるか、あるいは、かつてあったか」というようなテーマで、グループに分け、それぞれが用意してきたものを話し合ってもらいます。そしてその後クラスでシェアするのでありますが、例えば妊娠中絶、難民受け入れ、政権に対する賛否、EU への加盟/EU からの離脱、ダム建設等、色々、それぞれの国の事情が反映されているということと同時に、共通の部分が結構あるということで、お互

いに良い気づきになっていると言えます。例としまして、資料の 3 は、学生のコメントというよりも出してくれた問題例なのですけれども、どうぞ後でゆっくりご覧ください。書き方、ちょっと日本語が間違っている部分があってもお互いに共有できるということで、これも 2 コマの中の後半にやったということで、本当に短い時間の中で出してくれたものを私の方でまとめ、そのままコピペとか入力したということで、そんなに時間かけずに進めているというようなことがあります。日本語もネイティブチェックがいるというわけではないということの例としてご覧ください。

そして 3 番目です。発表タスクの実際ということで、是非見ていただきたいと思うのですけれども、「あなたのよく知っている言語を一つ選んでください。その言語と日本語の間で翻訳作業を行う時、どんな手続きが必要ですか。どんな問題がありますか。具体例を挙げて説明しましょう」というタスクを行い、分析をする練習も行います。これからお見せする映像は、本人からシンポでお見せする許可をもらいましたので、是非見ていただければと思います。

♪～発表学生の声～♪

本日、ラトビア語と日本語の比較、特に動作の授受表現についてお話したいと思います。皆さんは動作の授受表現について聞いたことがありますか。ないでしょうか。簡単に言いますと、動作の授受表現は、～てあげる、～てくれる、～てもらおうといった感謝等の意を含んだ表現です。一般に、やりもらい表現と言います。動作によって生じる利益の交換を表す表現です。私の考えでは、動作の授受表現は、日本人の人生の重要な部分の一つです。感謝や喜びの気持ちを持って、返すべきだと期待されている時に、やりもらい表現を使わないと他の人に違和感を与えたり、敵意や不満があるのではないかと疑われたりしますね。私は動作の授受表現について習った時、日本語で自分の気持ちを言葉で細かく伝えるように、こんな表現があるのかと、とてもびっくりして、今も動作の授受表現に興味を持っています。そして、授受表現はラトビア語では、ずいぶん日本語と違う表し方をしますので、このテーマを選びました。ラトビア語で動作の授受表現は違う表し方をするといいと言いましたが、ラトビア語文法規則辞典を調べてみたら、実際に、日本語の動作の授受表現のような表現が全くないということを知りました。なので、ラトビア語でどのように訳したら良いのかは本当に大きい問題です。

じゃあ、動作の授受表現の代わりにラトビア人は何を使うのでしょうか。感謝の時、直訳したら「ありがとう」か、「大きいありがとう」か、「巨大なありがとう」という表現が適切です。少し例を見ましょう。一つ目の例。手伝ってくれてありがとう」は、ラトビア語で「Paldies, ka palīdzēji」。直訳は、普通に「手伝ってありがとう」。それだけです。多分日本人にとって、あ、何か足りないという感じがするかもしれないですけど、ラトビア人はこういう言い方をします。二つ目の例。「家まで送って下さってありがとうございました」は、ラトビア語で「Liels paldies, ka atvedi mani」。日本語の直訳は、「家まで送って大きいありがとう」。

目上の立場にある人に対して、ありがとうの大きさが変わります。依頼の時は少し違いがあり、感謝より訳すのはちょっと難しいと思います。一つ目の例。「ペン貸してくれない？」ラトビア語で「Aizdosi man pildspalvu?」。直訳は、「ペン、貸す」それだけです。次の例。「この文章を読んでいただけませんか」は、ラトビア語で「Izlasīsi šo tekstu?」。日本語の直訳は、「この文章、読んだらどうですか」。

すみません、時間の関係で一部分にさせていただきます。この後で質疑応答して、他の国で、その「大

きいありがとう」を言うかどうか、色々意見交換をしたこともあります。このようなことから、学生のコメントでハンドアウトにもありますように、「自分の母語の特徴に気づくことができた」とか、あと、「いろいろな言語の特徴を知ることができ、視野が広がった」というようなコメントがありました。

そして、その次、2章のタスクとして、ブックレポートを発表タスクに課しているのですが、そのブックレポートでは、皆さんにお配りした発表、タスク、ブックレポート、資料の2ですが、書誌情報、作家の紹介、あらすじ、考察・感想など、自分自身の思考を考察・感想に入れるということをしてもらっています。それをしないと、ウィキペディアですとか、最近は読書レビューなんていうサイトもありますので、そのようなサイトの内容のコピペをできるだけ防ぐということから、そのようにしています。で、そこから、ブックレポートをグループで行うのですが、そのハンドアウトで、地域性ですとか普遍性ですとか、そういうことに気づいていくという形の学びが可能になっていると言えます。

で、ポスター発表、三つ目の発表なのですが、日本文化の不思議だ、面白い、魅力的だと思うことの中から一つを選び、詳しく調べ、分析をした上で、発表するということをしています。そして、その中で、分析という作業をここでもするために、用語の定義ですとか、分析、どのような観点から分析をするかということを確認して、それぞれの学生のトピックに合った方法で分析をし、発表してもらおうということをしています。トピックもこちらのハンドアウトにありますので、ご覧ください。本当にやわらかいテーマ・トピックから硬いものまで、伝統文化から新しいゆるキャラですとか、オタク文化ですとか、そのようなことまで、各自テーマを選んで、6、7分で発表する、そして3分ほどで質疑応答をするということをしていて、各自のテーマは絞りに絞ってもらって進めてもらう形になっています。発表の風景はこんな感じです。

ポスター発表のポスターはA1サイズで、各学生が自分の内容に合わせ、ポスターを作って、発表をする、そして、聞いてみたい人は質問をするという形式で、セッションに分けてやっています。時間の関係でちょっと端折らせていただきますけれども、ポスター例として、ブラジルの学生で、「ソト」と「ウチ」を分ける玄関の機能について考察をしたというとても興味深いものがありましたので、ご紹介します。人間関係が玄関の機能を作っているのではないかというような主張をしています。ちょっと見えにくいかもしれませんが、ハンドアウトを後にご覧いただければと思います。そして、学生達のコメントなのですが、「やってみて、意外と楽しかった」ですとか、あと、「ほかの学生の発表からさまざまな日本の文化を知ることができた」というようなこと、で、自文化、多文化の気づきが得られていることや、学びからの動機づけの向上が認められると感じました。

履修を通しての色々な学生のコメントを紹介します。一学期間、このようなテキストを読む、そして話す、そしてタスクをする活動によって、専門的なテーマについて話し合ったのは役立つ体験、入門的であっても役立つ経験であった、そして文化や地域間の比較ができて良かった、グローバルな感じ、視野が得られた、そしてそれぞれ学生同士が協力し合った、授業が優しい雰囲気だったといったコメントがあり、それは許容的な雰囲気、場があり、話ができ、進められたということだと感じています。そのような場により、自分の調べたことや考えたことを安心して示すことができたということかと思えます。

アカデミックな能力の変容。ちょっとパワポだととても見にくいのですが、ハンドアウトの方が三角が良く分かるかと思えます。研究・学問リテラシーは、楠見(2011)が言っているのですが、諸要因によって成り立つと言われています。批判的な思考、真ん中の所にありますけれども、それを基

に、研究・学問リテラシー、色々な要素の上に立つ、そしてそれを支えているのがスキル・知識、態度、論理的思考の自覚、探究心・開かれた心。許容的な雰囲気、そして自分がオープンにできるというようなことは、そのような雰囲気が大事だということかもしれません。客観性、熟慮などのような要因があるということ。そして、本学のアカデミック・ジャパニーズの Can-do リストがあるのですが、その基になる考え方としまして、言語的な知識・スキルがアカデミック・ジャパニーズ 1、そして、批判的思考ですとか問題発見・解決というようなことはアカデミック・ジャパニーズ 2 とっております、そのようなことが、上級に行けば行くほど、アカデミック・ジャパニーズ、日本語の 2 番の方ですね、大学という批判的思考ですとか問題発見、解決能力というようなことが関係してくるということで、それが実は、AJ1、アカデミック・ジャパニーズ 1 も 2 も相互に関係しているのではないかと、で、600 ではそのような、日本語のスキルは内容面から思考を深めることによって上がっていく、で、逆に日本語のレベルがアップすることによって思考が深まるということが言えると思いますので、その辺も関係づける活動というのは、とても意味があるのではないかと考えております。

資料に、601 で使っている、関係しておりますアカデミック Can-do リストの、資料 4 ですが、一部分をまとめましたので、是非ご覧ください。もしご興味がおありでしたら、東京外国語大学の留学生日本語教育センターのホームページに入ってください、ここのハンドアウトの最後の所にも載せておきましたので、是非ご利用いただければ幸いです。以上です。ありがとうございました。

【質問者】 2 週分のアクティブラーニング実施とのことですが、これは実際のタスクを行っているということですか？

【鈴木美加】 そうですね。発表の準備、例えば発表のアウトラインですとか、発表メモとかを作成し、提出する課題を行っております、それらをアクティブラーニングとしているという形です。

日本語非母語話者対象_海外の大学_キタハラ高野聡美

リオ州立大学から来ましたキタハラと申します。どうぞよろしくお願いたします。

私は2010年位から、センターの坂本先生、それから野本先生から招待を受けまして、これで4回目になると思います。日本語とか日本研究についてお話をさせていただいているのですが、何か、いつもおこがましいなと思って。私は元々、ラテンアメリカ研究が専門だったのですが、ブラジルに行ってからずっとブラジルに、そうですね、行ってもう27年位になるのですけれど、それからもうずっと、大学院を卒業してからは日本研究、日本語の方をやっていますので、それで今回その話をさせていただきたいと思います。私どもの大学で、この教科書を使い始めたのは、ちょうど2016年に第1版が発行されたということで、ちょうどその同じ年に、3月でしたね、私たちの大学に東京外国語大学のグローバルジャパンオフィスというのが南米で初めてできまして、それで今日いらしている木林先生が専門家として派遣されて、立石学長もいらして、その時に、木林先生の方から、今この『日本をたどりなおす29の方法』というのが出たので、使ってみてはいかがですかということで、いくつかの授業で使うようになったのです。で、同時期に同僚の教授が、国際交流基金の短期研修ですかね、日本の教育の専門家の研修に、浦和のセンターに行きまして、その浦和でもこれを使っているらしく、彼女は非日系なのですが、ちょっと、彼女が読むには、非ネイティブスピーカーだとちょっと難しいということで、先生使ってくれませんかと言われたので、私が大体中心になって使っています。今日それをちょっとお話ししたいと思います。

私どもの大学では、対象者と言いますのは、今回私は非母語話者ということだったのですが、実際には、二つに分かれます。一つは日本語非母語話者、その中でもまた分かれまして、日本に留学経験がある人、それは東京外国語大学が一番多いのですが、人数的には、ただ、他の、例えば千葉大学ですとか、熊本大学ですとか、最近はそのような大学ですね、そういう大学で一年間留学・研究をして帰って来たという学生たち。それから日本に留学経験がないというのと、後は私たちの教員と一緒に参加しています。ほとんどの学生のレベルは、大体日本語能力試験2級に合格するレベルですね。それだと大体読めるという感じだと思います。それからここに日本語母語話者と書きましたが、私どもの大学は、もうかなりの人数、今東京外国語大学から日本人の留学生を受け入れていまして、その学生達も結局一緒に授業に参加していますので、母語が日本語である人たちが一緒に勉強しているという、同じ教室に日本人の学生もいて、ブラジル人の学生もいるという状態ですね。それから領事館の職員の方とかで、専門家の人とかと一緒に来て、翻訳の授業とか一緒にやっていますので、それから、教員、母語話者というのは私なのですが、一緒にやっていますということで、実際には、日本語母語話者も使っているということです。

実際にどういう授業で使っているかと言いますと、例えば、日本文学の授業。これは私が担当している科目なのですが、日本文学というのは1から4まであります、その中で、これは、カッコの中に書いたのは、章ですね、この『たどりなおす29の方法』の章の中で、今まで読んだことがある、29の方法のうち、まだ私たちは10もいっていないと思うのですが、恋を歌うということ、現代俳句、世界の切り取り方、夏目漱石と村上春樹のところを使いました。で、どのように使ったかと言うと、副教材として使いました。というのは、ポルトガル語での日本研究の教科書というのはほとんどないのですよね、だから結局、文学とか歴史の先生たちは皆、自分で手作りをしなくてはいけなくて、『たどりなおす29の方法』が出る前までは全部自分たちの手作りで、切り貼りをして、あと原書を持ってきて読ませたり、講読をしたりという授業だったのですが、この本が出たことによって、もうちょっと包括的に行えることができるよう

になったのでよかったのではないかなと思います。例えば、この文学の授業でどんな工夫をしたかというところ、現代俳句のところでは、読んで、その後句会をしたのです。で、句会、後でお見せします、句会をした時の写真がありますので。それから恋を歌うという章では、百人一首を一緒にやって、それも写真をお見せいたします、後で。それから漱石と村上について、私たちは実際の彼らの作品を読むのですが、その背景についてよく柴田先生も書かれてあるので、非常に学生は理解するのに読みやすかったと言っていました。よかった点としては、個々の作品群の概要や背景を学べるということ。それから発展タスクのところも参考になった。問題点としては、特になかったのですが、日本語能力がかなり必要になるのですね、さっき鈴木先生がおっしゃっていたように。こちらでも日本語能力 1 級を目指す学生ぐらいですよ、やはり、J2 だとちょっとキツイかなという感じなので、日本語能力がある程度必要だと思います。

もう一つの授業は、日本語語源学というのを私がやっているのですが、その語源学の授業で、国語と日本語、それから翻訳文化と日本語という章を使ったことがあります。それもどのように使用したかと言いますと、副教材として使用しました。工夫点としては、基本的にこの授業では、私は金田一さんの『日本語の特質』という本、NHK ブックスの、あれを読んでいるのです。それから山口仲美さんの『日本の歴史』とか『ちびまる子ちゃんの語源教室』とか、ご存じですか、中学生向けの、ネイティブ向けなのですが、それとか、あとは北原保雄先生の『問題な日本語』とか、そういうのを読むながら、その中で、いくつか論題に上がったテーマと関連する課を『日本をたどりなおす 29 の方法』から探し出して読むというようなことをしました。それから、特にここでは、この授業では、ポルトガル語との比較というのを非常に議論します。その議論をする時にはポルトガル語を使っています。よかった点は、主教材の中で掘り下げたいテーマについて学生が気づき、調べるきっかけになったことです。多分先ほどの鈴木先生の話と重複する部分があると思いますが、問題点は特にありませんでした。

最後の授業で、これは、日本語、ポルトガル語の翻訳ゼミというのを、私たち行っているのですが、特にこれは、そうですね、日本人の留学生が活発に参加しているゼミなのですが、ここで使ったのは 2 つで、あなたは日本語の文法を知っていますかということと、友常先生のですよね、日本社会と天皇を使いました。どのように使用したかと言いますと、翻訳の主教材として、ここでは、前の 2 つの授業では副教材として使っていたのですが、ここでは主教材として使っています。前年までにどういうものを使っていたかと言いますと、茶の本とか、武士道とか、菊と刀とか、マンガで読むシリーズってありますよね、あれを全部訳しているのですけれど、マンガなので大したことないのですが、とは言っても、マンガも訳すのはかなり難しく、マンガだとちょっと難しい点がまた違うのですが、それよりもうちよつとちゃんとしたものを訳そうかという話になりまして、そうしたらちょうど『日本をたどりなおす 29 の方法』を使ってはどうかと学生たちから声が上がりましたので、使っています。ここの授業での工夫点は、対照言語研究の視点というのを取り入れています。よかった点は、内容が非常に多岐にわたっていますよね、この教科書は、だから翻訳内容として、日本というものを様々な視点からポルトガル語にできる最良の翻訳実践の材料になっているということだと思います。問題点は、すみませんが書かせていただいたのですが、課によっては日本語そのものの特色でもある省略とか曖昧性、特に社会科学関係の文章ですよ、それが感じられる箇所があり、翻訳ゼミの主教材として使用するのに、まあちょっと苦労しました。ただし、逆に翻訳というものを考えて、日本語自体を吟味するきっかけにもなりました。特に日本語母語者の日本人留学生や大使館の職員、そういう人たちにとっては、日本語というのは非常に、他言語に訳すのは非常に難しいと言う。主語は曖昧だし、省略がたくさんあるということで、非常に議論が活発化して

よかったと思います。

最後に、後で何かご質問があったら受けませんが、実際の学生の感想を書いてくれ、送れと言ったら送ってきたのですね、彼らは。それを読みます。彼女はブラジル人女子大学生で、東京外大で一年間留学経験がある、で、彼女が送ってきてくれた感想はこれです。「とても良い教材だと思いますし、外大留学時にも良い印象を持ちました。ただし、いくつかの章はかなり難しい語彙が含まれているため、上級者向きかと思います。テーマごとに章分けがしてあり、深く考察がされているので日本文化についての理解を深める助けになりました。この本の長所は各テーマごとにアプローチがなされて、議論のきっかけにもなり、教科書として素晴らしいと思います。文章自体は難しいものの、日本研究にはとりわけ重要な本だと思います」。これ、先ほど鈴木先生の発表を聞いて、彼女はきっとこれを一生懸命やっていたので、だからこういう感想が。

で、次の感想は、ああ、なるほどと思いました。鈴木先生の発表を聞いて、ああ、この子はそういうことでこれを送ってきたのだなど。実はSさんよりもTさんの方が、日本語がかなりできるのですね。彼も同じようにブラジル人男子大学生、東京外大で一年間留学経験がある学生です。「日本で（留学中に）この本を使った際にとっても気に入りました。というのも授業の中心は共通のテーマに基づいて書かれた各章のテキストを読んだうえでのディスカッションが中心だったからです。この方法ですと、テキストは各章ごとに内容が類似しているため、語彙の習得と文章理解をやさしくしてくれます。もう一つのポイントとして、いくつかの練習問題は日本で留学期間に使われてこそ生かされると思います。一つの大テーマで、日本語を共通に使った場合、ほかの国から来た留学生を観察することでまた違った価値観に気づかされるからです。各章の最後には様々な発表の方法が教示され、勉強したテーマについてより考えが深まるように工夫されているのも良いと思います」。これは続きます。「上記のような経験があったため、日本留学時代に身につけた方法を帰国後も実行しようと思いました。というのも、ブラジルでこれまで使用してきた教科書は多岐にわたり、單元ごとに関連性があまりなく、文法理解と翻訳が中心だったからです。日本留学中の文章理解を中心とした日本でのやり方とは違っていたからです。もしこの本がブラジルでも従来通りの方法で使われていたとすれば、私のこの本への印象はこれほどよくなかったかもしれません。結局この本はどういう方法で使われるかがとても重要なポイントだと思います」。かなり彼は分かっている、日本語が、前の彼女よりも彼の方がかなりできる子なのですね。かなり彼は分かっている子だと思いました。

次に、東京外国語大学から本学への留学中の男子留学生、日本人大学生のコメントです。「日本語を近現代の日本史や日本文化を通して学べることはとても良いと思いました。使われている語彙はかなりハイレベルで固有名詞も多く、日常生活ではあまり見かけない日本語もありますが、文章の内容は日本人にとっても興味深かったです」。こういう3人の感想を、先ほど鈴木さんが発表されたことで、私は非常にうなずいてしまいました。で、日本人留学生にとっても、この教科書は非常に役に立つということを聞きました。共同授業というのはあるのですかね、留学生と。あると良いと思いますよ、何かすごく。日本人の留学生が日本語を知らないという、何か、よく突っ込むのですが、結構難しい言葉があると、彼らは分からないと言うのがありまして。

最後に、これは句会に参加して。これサンパウロでこの間日本語合宿をしたのですが、その時にサンパウロにいる俳句の選者の先生がいらして、句会を、菅長先生の俳句をやってみようというタスクに書いてあったので、皆でサンパウロへ行きまして、そこでサンパウロで有名な俳句の先生をお呼びして、これ皆で

作っているところですね。先生はニッケイ新聞という日系の新聞なのですが、そこで彼はそれを記事にして発表して、学生の選ばれた作品をその新聞に載せている。記事を書いているところですね。それから百人一首。これは、百人一首をやっているところですね。ちょっと畳がなかったもので、テーブルになってしまったのですが。最初2回だけやったのですが、最初は個人戦でやって、決勝戦はダブルス戦にしてやってみて、私も何か、100人だから2千回くらい読みましたね。最後は声をからして結構大変だったのです。ちょっと茶色系の彼が優勝したのですが、合宿だったのですが、彼は決勝戦の前に50首まで暗記してきまして、下の句を、それでもう、臨んだので。そうですね、これも百人一首をやっているところですね。これは実はサンパウロの日伯寺というお寺で一週間合宿をしたのですが、その時の。中央に座っている先生が、俳句の伊那先生という方で。こちらのところで、前方に座っている赤い服の女の子が外大、外大に留学していた子が3人くらい、マックスとか、いますね。何か質問があったら後でまた。

【坂本】ありがとうございました。今のお話の中で、日本人にもというのは長年の私の夢なのですがけれども、混合クラスでできたら本当に良いなと。教師が一番勉強になるというクラスなのですね。色々な発表、これ、本当に日本人の学生に聞かせたいと思うのですがけれども、なかなかその枠がなくて、そういう授業が開けないというのが本当に残念です。交流型授業もやっぴまして、それで参加してもらっているのですが、日本人の学生が出て、大体あまり知らないですからね、あまり答えられないというのをつくづく感じて帰っていつているというような感じです。

この機会に、この教科書を使用していただいた北京大学の趙華敏先生が、今度こういうシンポジウムをしますと言ったら、自分の授業でも使っていますということで、コメントを下さったので、それを読ませていただきます。

「北京大学で私が担当する「日本語閲読」という3年生の授業で使わせていただきました。言語学や文学の授業が別にあるので、第3章から第6章の一部を使わせていただきました。具体的には、いくつかあるのですが、やり方としては、本文、まず本文の理解をしてから中国のことと比較しながら考えたり、話し合ったりしてもらいました。ディスカッション、ディベート、プレゼンの方法も援用しながら学生たちと楽しく勉強していました。学生の発表も良かったです。残念なことに、学生の発表の資料を手元に残さなかったもので、今回は提供できません。教科書そのものは内容が豊富で、日本を知るためには非常に役立つと感じました。とは言っても、教科書の内容を全部分かってもらえるにはそんなに簡単なことではないとつくづく感じました」。こういうコメントをいただきました。ずっと使って下さっているようです。ですから、海外でもこういったディスカッションを中心とした授業が展開されているようです。

本当にキタハラ先生、ありがとうございました。

日本語非母語話者対象_国内大学2_李婷

【坂本】 それでは国内の大学のもう一つの例ですけれども、日本大学の助教をしている李婷先生にお願いいたします。

ご紹介いただきました、日本大学文理学部の李婷と申します。それでは「学部留学生初年次日本語教育における国際日本研究の小さな試み」という題でお話をさせていただきます。

本発表の流れですけれども、まず授業の概要をご紹介します、それから前期と後期、一年度通した授業になりますので、それぞれについてご紹介した上で、自分なりの考察と、今後の教育実践への示唆について述べさせていただきます。最後の質疑応答の時に、学習者にも登場してもらいますので、どうしても学習者にご質問おありの方は是非よろしく願います。発表を聞く間に、学習者の成果物の一部をコピーして持ってきましたので、よかったら20分で行き渡るようお願いいたします。ご覧いただければ嬉しいです。

まず授業の概要ですけれども、本学部、学部留学生にとって必修科目として、日本語8科目8単位となっておりますけれども、私が担当した2018年度の前期の「日本語中上級1」と後期の「日本語中上級2」の2クラスになります。2科目で更にそれぞれAクラスとBクラスに分かれて、合わせて4クラスのデータを使用させていただきました。テキストはもちろん、通称『29の方法』を使用させていただいております。ちょっと断っておきたいのですけれども、本発表で使用する学習者の成果物、全て使用許諾を得ております。

で、次、こちらの方は、2018年度前期の「中上級1」の方になります。最初の学期、日大に行って最初の授業だったので、学習者がどういうレベルなのか、全然把握できていない状態で授業を始めました。なので、予め作っておいたシラバスでそのまま忠実に、いかにも読解らしい授業をしていました。教室活動としては、学生によるキーワードの解説とか、あと、時期に合わせて新しい話題も持ってきたりとか、例えば日大のアメフト問題の謝罪、ちょうど「すみません」の言外の意味、という授業だったので、そういったトピックも扱ったりして、学習者とディスカッションを行いながら、読解の授業をやっていました。最後のポスター発表会を行ったところで、すごい、学習者の才能が全開されて、私の意識も変わりました。こちらは当時使った、ポスター発表会のチラシになります。学習者の力作ですね、あと、ファイルの中にもありますので、よかったらご覧ください。それは授業風景となります。

反省点、色々ありました。ただし、授業スタイルの転換に繋がるような反省点として、ご覧の3点、挙げられます。まず、一つ目、学生によるキーワードの解説で気づいた学習者の力ということになります。例えば、天皇について、キーワードの解説の時に、学習者に任せたら、本当に、歴史学科の学生なので、すごく熱く、塾の講師みたいにレクチャーをしてくれましたので、もうはるかに私一人の教師としての守備範囲を超えたところで、すごくいい授業をしてくれましたので、よかったなあと思いました。で、もう一つ、テーマによっては、学習者の参加度にすごい温度差を感じたことがあります。例えば参加度の高いテーマとして、日本語語学関係、例えば挨拶表現とか、すみませんとか、といった、文章も読みやすかったですし、あと、学習者の語れること、いっぱいありますので、すごくノリがよかったです。後半になると、天皇とか、宗教とかの話は、結構やっぱり高度な知識が求められるので、そこですごく下がってきているなあというのを肌で感じています。最後、ポスターの発表を行ってみたところ、すごい、学習

者、表現したい、自分の調べたことを皆さんに見せたいという意欲をすごく感じましたので、そうしたら、やはり学習者主体の授業に転換しようと思って、後期のシラバスを全部作り直しました。

テーマとしては、前期やっていないテーマであれば何でも大丈夫、というリクエストで、このようなテーマとグループの編成となりました。向かって左側が A クラス、人数があまりにも多くて、36 名で 8 グループになりますけれども、B クラスはちょうど良いバランスで受講生 20 名の 5 つのグループになります。こちらのテーマが選ばれた理由について聞き取り調査をしたところ、ご覧のような、例えば何々学科、教育学科だから教育の機会均等を選んだとか、国文学科だから文学系を選んだとか、興味関心というのが上がってきております。一番上の行は、最初の発表なので誰もやりたがらない、ですので教師として見本を見せるつもりで、私の方で発表をしたのですけれども、日本語教育専攻待遇コミュニケーション研究の私にとってはピッタリのテーマでした。何かしら好きなテーマが見つかるというのも、この教科書のすごいメリットだなあと感じました。

授業の流れと教師の役割は割愛いたします。

いくつかの発表例について簡単にご紹介したいと思います。まず一つ目、「教育の機会均等」とは何か。これは教育学科の 7 名の学生がチームを組んで、見事な発表をしてくれました。一人目の SA09 は、前半調べることから、全般に渡るような発表をしてくれて、2 人目から 3 人目、4 人目までは、性別による格差、経済による格差と、国籍による教育格差。残る 3 人は、中国の大陸部と香港、台湾の教育格差という、皆、教育格差をめぐる本当に色々なアプローチから調査をし、それについて発表してくれて、整合性もあり、完成度も高い発表となります。例えば性別の教育格差のところ、東京医科大学で起きた女子だけ減点された問題を取り上げたりとか、経済格差のところ、日本の子供の貧困問題、あと国籍による教育格差では今すごく注目度の高い「移動する子供たち」のような、クローズアップされた、本当に研究発表になっていると思います。

次の発表例の 2 番なのですけれども、これは A クラスも B クラスも同じテーマを選びました。当たり前のことですが、全く異なる発表になっていて、面白いなあと思ったので持ってきました。A クラス、向かって左側ですね、英文学科の学生がいたので、ユネスコの「世界危機言語地図」を持って来て、世界に向けた発表、世界規模の話をしてくれました。それに対して B クラスは割と、教科書に沿ったような発表だったのですけれども、まさか柳田國男の『蝸牛考』を調べてきたとは、本当に驚きの連続です。ただし、B クラスはちょっと人数も少なく、発表の時間も長かったため、2 週目はほとんど発表のネタが尽きたと言っていましたので、私の方でフォローしました。今回、この回に関しては、中国と韓国の留学生がいたので、それに合わせて記事を探したり、あとアニメ好きな人が多いので、魅力的なマンガアニメの方言キャラトップ 20 とか、あと、本学の教授の著書の、本の書評すかね、書評を持ってきたり、みんなで一緒に読んだ上でまたディスカッションするというようなやり方で授業をやっております。

次、3 つ目は箏曲家のインタビューですけれども、たまたま A クラスに、習い事で、お琴や三味線、茶道、お花まで習うという学生がいたので、本当にこのテーマがヒット、大ヒットだったのです。で、ちゃんと今日、本人も来ましたので、後ほどよろしくお願ひします。この発表で、すごくよかったところは、琴の部品？ 道具？ 本物を教室に持ってきてくれたので、やっぱり後で皆さんのコメントシートには、すごい好評が書かれていました。今日も、すみません、ちょっと回していただけますか。あと、この発表の最終回においては、インタビューだったので、インタビュー記事の形式、一人称形式、三人称形式、Q&A 形式や対談形式についてレクチャーしてくれた学生もいて、予想外の展開ですが、すごく勉強になった

発表となります。もっと紹介したいですけど、時間の関係上割愛します。

先ほどご紹介したような、チームによる発表が終わってから、学習者にコメントシートの記入と提出を課していますが、これも教科書のプレゼンテーションの評価を参考にして、少しだけアレンジしたのになります。ここからも、たくさん宝物が得られましたので、ざっとした分析ですが、6点について簡単に述べさせていただきます。

まず、高く評価されたポイントとして、スライドとか板書、あと図表の使い方ですね。多分今ご覧になっていると思いますが、学習者の作ったスライドが本当にお見事で、いつも逆に勉強させていただいています。

次は資料の使い方の実物ですね。あと写真とか漫画の活用。学習者の個性がいっぱい表れていると思います。例えばこちらの写真は夏目漱石の『坊ちゃん』の紹介で学習者がどこかで検索して拾ってきた、ドラマの人物紹介像ですね。これもすごく皆の目を光らせていた場面だったと思います。あと、たぬきとか、赤シャツとかについて、すごくユーモラスな写真も持ってきてくれたり。あと、動画はやっぱり画像の力と言うか、非常に良いコンテンツだなあと改めて再認識できました。例えば村上春樹のスピーチを皆で一緒に見て、距離感が縮んだというコメントも得られました。最後、話題や事例についてもすごい好評が得られたものもあります。

次は、高く評価された発表者ですけど、発表方法として、やはり聞き手とのインタラクティブが良い発表が、やはり人気、評価が高かったのと。あと、専門知識とか、分かりやすさ、あと、ただ紹介するのではなく、自分の考えや自分の感想が入っている発表、あと頑張っている姿と真面目な態度だったりとか、そういったコメントはあります。

このような授業でどのようなものが学び得られているのか、どのような気づきを得られているのかについてもたくさんコメントをもらっています。例えば、これは発表のテーマ、テーマごとの提示になりますけれども、「震災後の暮らし」のところで、2011年、多分今の学部1年生はまだ日本に来ていないので、当時は多分全然、あまり関心がなかったと思われませんが、この授業を通して、すごく何度も泣きそうになったという、あと、そうですね、防災意識、日本で実際に地震を経験したというコメントもあります。

次は、夏目漱石の授業のコメントだったのですが、例えば、2行目の「普段自分から能動的に学ばない知識、ほんの少しだけ、勉強になりました。」とか、あと、発表者のコメントですね、3行目の「この発表のテーマを決める前に実際に読んだことがない、で、発表をきっかけとして、夏目漱石の作品を読んだり、様々なことを調べて、すごくいい勉強だと思います」というような嬉しいコメントも得られました。一番下から2つ目ですかね、この学生は、いつもコメントシートで、私は読書をしないというのを主張してきていましたが、ようやく夏目漱石の回で、「昔の人たちの生活や考え方をのぞけるのは少し、少しですが興味深い」という、多分もうすぐ本に手を伸ばすのかなあというようなコメントだったので、すごく嬉しいと思いました。

次、「怪異小説」のコメントなのでですけど、ここでご覧になっていただきたいのは、最後の「最初は全然怪異小説について全く興味なかったんですけど、発表とかアニメを見てみると、興味深いと感じました」、あともう一つ、多分自分で調べたでしょうね？一番上ですが、怪異小説が広がった理由について、多分ひっかかったのだと思います、で、「自分で調べました」というような、何かのきっかけでまた新しい学びが起こる瞬間だったと思います。

次、各回ではなくて、全体の発表という教室活動、発表という経験を通して、どのような気づきや学び

が得られたかという、例えば聴き手意識とか、あと、すごく、教師、教壇に立つことに憧れていた学生が教師の意味を改めて認識、理解できたとか、あと、人の前でプレゼンテーションをしたり、パワポをつくったりすることが初めてだったというコメントももらいました。あと、真ん中あたりのコメントですけれども、前期のポスター発表はほぼウィキペディアを利用して、整理してきたものに少し自分なりの解釈を加えただけなのですが、後期の発表は、ちょっと本気を出して、ちゃんと文献を読んで発表しました。やっぱりその違いが感じられたというコメントですね。後期の方がもっと論理性とか、まとめる力が要求されて、すごく勉強になった。しかもこれからも努力していきたいという授業のやりがいを感じるのであるようなコメントだったのですけれども。

まだまだありますが、この教室授業という限られた時間と空間の中で、勉強できるものはどうしても限られているのですが、もし何かきっかけになって、また勉強していくということができれば、多分教師として最も望んでいることじゃないかなと思って、このようなコメントもずらりと並べてあります。何かもっと読みたくなった、自分で調べてもっと深く勉強したい、研究したいというようなコメントもありました。

もちろん人の評価だけではなくて、反省もかなり入っています。例えば自分自身の発表で、専門用語がちょっと難しかった、練習がやっぱり足りなかった、話すスピードが速かったというような、また実際に経験しないとなかなか気づかないことに気づいてくれる、あと、自分の理解不足でチームの足を引っ張りましてというすごく痛い経験をした学習者もいたと思うのです。「次回からちゃんとしっかり準備していきますので、よろしくお願いします」みたいなコメントもあります。もしこれくらい反省できれば、これからの成長も望めるのではないかなあと願っております。

次の反省としては、個人のレベルではなくて、チームの反省点となります。例えば、真ん中あたりですかね、文章の順序、構成、あと役割分担とスライドについてはすごく自信がありますが、やはり用意した映像、長すぎたかなと感じました。メンバーの日本語力もかなり高いですが、発表前日に準備した内容なので、練習が足りない部分も反省しておりますと、すごく的確なコメントを書いてくれる学習者もいます。あと、チームワーク、すごく苦手というようなコメントもあったのですが、このコメントも正にそれですね、個人プレーの方が楽だが、でも最後は自分の興味に引っ張られて、やりたい放題になったことはやっぱりダメだと気づいたので、よかったなと思います。

あと、反省も含めて指摘ですかね、特に辛口の指摘も結構ありましたので、そのまま載せておきました。発表者への指摘として、話す時の文法を要注意。「あの」とか「ええと」のような言葉は止めた方がよいという大学1年生のコメントです。次、発音とか緊張感をもっとコントロールできればよい、聴き手とのアイコンタクトがあった方がよいというような。教師からは本当に言わなくてもよいような気づきがありますので、本当に、私の方から学習者云々とは全然言っていないですし、言う必要も多分ないのかなと思って、ずっと控えていたのですが、最後、テーマとして、ちょっとあまり日常的ではないので、そういう学術的なものを詰め込むより、もう少しライトな発表、これはさっきの読書があまり好きでない人のコメントですが、こういうコメントからもすごく学習者の個性が見られます。

まだまだ続きますが、全体への指摘として、もうちょっと視聴者、聴いている人の意見や考えを何う必要がやっぱりあると。あと、この教育機会均等というテーマは、すごく皆が聴いてよかったと思ったので、もっともっと議論がしたかったところに授業が終わってしまったので、やっぱりもう一回時間を作って検討した方がよいというコメントもありました。あと、やっぱりプレゼンをする時は、すごく一生懸

命頑張るけれど、他の人のプレゼンとなると、ちょっと聴いてない人も確かにいます。

次は、私への鋭い指摘なのですが、ちょっとまあ、指摘しないことで、ちょっと不満もあったのかなあというのがあります。例えば、文法やアクセントの違いがあったら指摘して下さいというようなリクエストが来ています。ちょっと評価、足りないのかなあ、と。教師のコメントシートも一応書いて、配布して、あと、学習者のフィードバック、コメントシートを踏まえた上でフィードバックはしていますけれども、それでもやっぱり足りないというような、ちょっとやっぱり教員に頼りたいという1年生の特徴がまだ見られています。あと、そうですね、先ほどの話とも重なりますけれども、特に私が担当するクラスは、教員も学生もほぼ全員中国人で、もっと日本の方と意見交換をしたいという要望がすごくあります。これくらいにしておきます。

最後、考察ですけれども、まず、初年次なので、いきなり日本語の授業をアクティブラーニングに変えるのは、まあ、ちょっとやってみたところで、やっぱり難しい。難しかったので、高校、日本語学校、そして大学への繋ぎを、どういうふうによくやっていたのかというのは、非常に大きな課題になっていると思います。転換期なので、少しずつでも、私の方では少しずつ学習者中心へと移行しているところです。次、教師の役割についてですけれども、指導者なのか、ファシリテーターなのか、すごく迷った時期もあるので、一つに徹するよりかは、往還した方が良いのかな、と個人的に今思っているところです。もう一つ、ノンネイティブ教師、しかも若手というマイナーな存在ですけれども、そういう呪縛から解放、脱却したいなと思っています。自分がノンネイティブだからああだ、こうだと考えるよりは、私にできることとできないこと、今の自分の守備範囲をいかに広げていくのかですね、私の課題になると思います。3点目、発表のテーマと内容なのですが、教科書の中のテーマといっても、このテーマをきっかけにまた新しい何かが見つかりますので、すごく能動的にテーマ探しをする学習者もいれば、隣の人がこのテーマにしたから、じゃあ私もそうしようというような受け身的なテーマ探しもあったりします。ここで言いたいのは、やっぱり、1人の教師ではどうしてもカバーできないもの、分野などがありますが、それを補ってくれるのが逆に学習者だったりすることが十分あり得ます。その辺も、学生の力を是非是非私も活かしたいし、先生方にも活かしていただきたいなと思います。

最後、グループワーク、編成とか、グループワークとプレゼンテーションですね、コメントシートの考察になりますけれども、ちょっと時間になってしまったようですので、今後の教育実践の示唆として、最後にまとめさせていただきます。まず、そうですね、留学生と日本人学生、もし共同で一緒に学べたら、どのくらい良い授業ができるかというのを、すごく夢見ていますが、いつか実現できると良いなと思っています。あとゲストセッションですね、例えばこの分野だったらこの専門家に来てもらったりとか、来ていただけなくても、インタビュー、学習者にインタビューさせたりとか、あと、リレー講義、もし実現できたら良いかなというのが、あくまでも、まだ妄想している段階ですけれども、3点目から7点目は来学期実施する予定になります。例えば、ポスター発表会で前回は一応チラシを配りましたが、教室内ということもあり、誰にも来てもらえなかったのが、今回は大学のラーニング・コモンズを利用して、オープンされた環境でポスター発表会をやりたいと思います。あと振り返ってみるためにも、発表を録画したり、発表だけではなくてテーマ探しから、その一連の研究活動の支援に携わりたいと思っています。ちょっと駆け足になってしまいましたが、よろしくお願いします。

【坂本】 せっかくですので学習者の方、何か一言お願いできますか。

【学生】さっき、先生方、こうしたら良いとおっしゃっていましたが。結構日本文化を理解するというか、知るためにはすごく良い教材じゃないかなと、私自身は思います。でも中にはやっぱり難しい章とかも、例えば俳句とか和歌とか、外国人にはちょっと難しいのではないですか。まあそういう文法とか古文の勉強とかしたら理解しやすいかもしれないのですが、まあ、そういう勉強、私たちは全くやったことがなくて、難しかったかなと自分が感じました。とてもよかったですと思いました。以上です。

【坂本先生】それでは後半の報告で、聖心女子大学文学部の清水先生に、日本人学生対象の授業についてご報告いただきます。では、宜しくお願いいたします。

聖心女子大学の清水由貴子です。どうぞ宜しくお願いします。国内大学の学部向け授業での、ということなので、日本語母語話者に向けた授業での報告をさせていただきます。どうぞ宜しくお願いいたします。

まず、授業概要、このテキストを使用した授業になりますが、「対照言語学」という授業でやりました。受講生は全員で42名です。全員文学部の学生になります。ですが、学科に分かれているので、学科別に見てみると、日本語日本文学科の学生が30名、英語英文学科の学生が7名、それから教育が3名、心理が1人。それから留学生、短期留学生が1人受講していました。これで42名です。留学生が1人含まれているのですけれど、ほぼ日本人向けのというか、そういうタイプのクラスでした。この授業の内容は、日本語はどんな言語なのかを知ることがまず一つの大きな目標だったのですが、それをするために日本語を分析的に見たり、違うタイプの言語と比べてみたりすることが一番やりたい内容でした。半期の授業で15回あるのですけれど、1回は試験なので、あとの14回を、基本的には講義型の授業です。10回は講義型、私が授業をこのようにやるという、一斉授業の形なのですが、あとの4回、5回を、ちょっとアクティブラーニング的な要素を入れたくて、その時に何か良いトピックないかなど。あと、講義でやったものが、あ、こういうことなのねと腑に落ちるといふか、詰込み型ではなくて自分たちで話をしながら、さっき言っていたこれはこのことだったんだみたいに、落とし込むために、何かトピックないかなどという時に、この29ですね、これを、あ、これは使えそうだと思います、使わせていただきました。特に、対照言語学、言語学の授業だったので、第1章が本当にぴったりで、第1章のみ使っています。選んだ理由としては、やはり母語話者だからこそ、「ああ、こういうのよくあるよねー」とか「わかる、わかる」というような、共感できる、すぐにとっつきやすいテーマであったこととか、前情報、前知識なしで、自分のネイティブの言語なので、すぐに入り込めるといふか、その話をしているのね、と分かりやすいというところ。あとそれから、逆に、母語話者だからこそ、意識が行かない部分についても、やはり「へえー」とか、「そういえばそうだなあ、でも何でだろう」というような問いといふのですかね、そういうものが結構あったので、これは、ここは使わせてもらおうと判断したところでは。

それから授業の流れですけれども、さきほど言いましたように、基本的には講義型の授業をしていました。その間にアクティブラーニングを差し込むみたいな形でやっていました。何回か講義が続いた後にアクティブラーニングというように、4つトピックを使わせていただきました。教科書ですけれど、教科書を購入したりコピーしたりということはないで、私が使いたいところだけをつまんで、つまみ食いするような形なのですが、自分の講義型の授業に合うように、差し込むために、これは良さそうだという部分をつまんだ形になっています。まず私が教科書を読みこんで、あ、このトピックの中ではここが大切だ、ここを問いにしたい、そして大きな答えはここに持っていきたいというようなものをまず組み立てておいて、それについて学生に問いかけをして、ディスカッションをしてもらって、それを発表してもらいたい形に進めていきました。授業の前に予め私が各課の本文をよく読んでおき、あ、これ良いなと思う「問いかけ」を抜粋しておくという作業がまずありました。授業中には、まず一つ目ですが、「問

いかけ」を提示して、グループでディスカッションをしてもらう。グループというのは、隣に座っている3人でグループを作るような、そういう感じなのですけれども、話し合ってもら。で、グループ毎に出てきた意見を発表してもら。はい次、後ろ、後ろ、後ろ、みたいな感じでどんどん発表してもらことです。そういう作業を何回か繰り返しています。ものによって、大きい質問だと1回しかできなかったり、小さい質問だと3、4回そういうのが続いたりもしますけれども、そういうことでだんだんほぐしていくというか、だんだん質問を難しくしていくような形で進めました。それから授業の終盤、残り30分位の所で、本文中の、今度は本当に本文ですね、本文中の解説を踏まえた上で、皆から出てきた意見を板書、ここに書き取るのですけれども、それを使いながら、やはり本文にも書いてあったとおりこの意見が出たねとか、本文には書いてあったけれども、皆からは出てこなかった意見というの、私はもう事前に読んできて分かるので、こんなのはどうでしょうかというような投げかけをしたりして、まとめを行いました。私は自分が授業をやってみて、この部分が一番難しかったところではあります。それから学生にはいつもコメントシートというのを書いてもらっているのですけれども、グループでの意見は発表していますが、個々の学生の意見は、一人一人は聞き取りできないので、そういうのは全部授業の最後に感想シートに書いてもらうようにしています。特に自分の意見は発表されなかったけど、自分はこういうところが腑に落ちなかったというようなことを特に書くように言っています。ここまでが授業中にやることで、その後、私が感想シートを集めて、まだよく分からなかったとか、こういうことはどうでしょうというような鋭い質問を集めまして、翌週の授業の冒頭で紹介したり、ちょっとまだ分からないという指摘があった部分に関しては、補足説明をしたり、そこで初めて教科書のコピーを渡し、これが元の原文なんだけどと、確認させることをしています。

それではここから、トピック毎にどんなことを、どんな使い方をして、どのような反応があったかというところを紹介していきたいと思います。先ほど申しましたように、第1章の1、2、3、4、これを使いました。第1章の1というのは、あなたは日本語の文法を知っていますか、というタイトルなのですが、タイトルはそのまま見せたのですけれども、このタイトルからして、もう、うーん、となってしまうですね。それはディスカッションではなくて、適当にランダムに当てて、あなたはどう思う？日本語の文法知っている？と聞いて回るのですけれども、すると、うーんとシドロモドロになってしまう学生がほとんどですね。なぜかと言うと、話せるし、人が言ったこと聞いて分かるから、知っているはずなのですけれども、何をもって知っている、分かると思なして良いのか、ちょっと分からないので、と言ってシドロモドロになってしまう。あと、英文法は習ったので分かります、あと古典の文法も、まあ、あまり苦手だったけれど国語の授業の時にやったので、まあ分かります、でも、現代日本語の文法と言われると、主語述語とかそれですか？ そういう感じになってきて、そうすると、だんだん一人がそんなこと言い出すと、ああ、嫌だったよね、あの授業、みたいな、中高の時の国語の授業を思い出したのか、小説なんか読むときはすごく楽しかったけれど、文法の授業が本当にしんどかったと、ああ、あのこと指しているのかと思うと、皆暗い気分になってしまって、不穏な雰囲気になってしまいますが、そこで、次のような作業ですね。テキスト本文中にもあるのですけれども、「さっき、真剣、図書館、ねえねえ、本、むずかしい、山田君、読む」という単語から、意味が通る自然な日本語に、日本語の一文にしてみたいという作業をさせてみます。そうすると、今ここに示した、一つ下に示したものは、解答例になりますが、これは教科書にも載っているもので、40何人いるなかで、大体これに近づくのですよね。何か違うものが出てきてもよさそうなのに、語順も多少ゆれてもよさそうなのに、大体これに近づく。もちろん語順が、「ね

えねえ、図書館でさっきね」みたいな話し方する人もいますし、「ねえねえ山田君、さっきむずかしそうな本読んでたよね」のような、「そっち行ったか」というような、なかなか言わなさそうな文を作ってくれたりもしますけれども、まあそれでも、ちょっと言えば、「あ、そういう状況ね、それだったらこれが一番適切だと思います」のように、多少幅はありますけれども大体これに収まるのがまた皆不思議だったりして、ネイティブだと大体同じものを書くのだという、そこに落ち着くのだという発見もあつたりします。ここまでは、「おお、できた、できた」と。何グループかありますが、似たようなものができたということで、「なかなか日本語って難しいよね」みたいなことを言い出すのですけれども、更に、「じゃあ何でその順番にして、何で、例えば助詞だとか助動詞を補った形をつけたのか」と、説明させようとすると、またたちまちうーんとなってしまう、「何となくです」、「こういう順番にしたのは何となくそうだから」というふうに、ちょっとまたシドロモドロになってしまうことがあります。が、非常にそこが新鮮で、そんなこと考えたこともなかったというふうに。「ねえねえ」という言葉で始まったら、最後は「よ」か「ね」か、何かしら付けないと、話しかけの働きかけを表すような終助詞を付けないと落ち着きが悪いということに初めて気づいたとか、そういうような新鮮さ、新鮮な気づきがあつたという反応を後で示してくれました。日本語の文法を説明できないもどかしさ、「ネイティブなのに」と学生は言うのですが、私がそこで「ネイティブだからですよ」と言って、「だから気づかない、そんなの普通だ」ということで、そこで「もう勉強するのを止める、イヤだ」とするのではなくて、「だからもうちょっと興味持って」と、寄せていくようにしています。で、これは私の興味でもあつたのですけれども、ここまでは教科書のテキストにも載っていた部分で、そこからアラビア語、ベンガル語、インドネシア語、中国語版を用意しました。私はどの言語も分からないのですが、元学生、元教え子たちに頼んで、「ねえねえ、さっき図書館で山田君がむずかしそうな本を真剣に読んでいたよ」という日本語を、「あなたのお国の言葉に訳して、一つ一つの単語に日本語の直訳を付けて」とお願いして、ちょっと教材を作ったのです。またそれを分析させたら、「日本語と語順が違う」とか、「日本語だったらこういう部品を付け足さなくてはならないのに、この言語だったら何か並べただけ」みたいな、そういう気づきがありまして。2年生から4年生の学生が取っているんで、そんなにまだ第二外国語に自信を持っているとか、ペラペラ話せるような知識もまだない状態の学生も入っているんで、そういう気づきが面白かったです。また「あ、確かに今インドネシア語やっているけれどそうだった」みたいな、語学のクラスでやっているときはあまり理解できなかったことも、日本語と対照させるという視点からすると、「あ、なるほど」みたいに気づくというのがあって、面白がってやっていました。

実はこれ、高校生向けにもう少しアレンジして、もう少し簡単というか、アレンジしてオープンキャンパスで使ったこともあります。やはり同じような反応をして、「日本語だから余裕だよ」という感じの日本人学生にやるのですけれども、シドロモドロみたいになるところがちょっと面白いところです。

続いてですが2つ目、「日本語にはなぜ挨拶表現が多いのか」このタイトルを見せると、「あ、今日の授業楽勝だ」という顔をするのですね。挨拶だし、日本語だし、でも何で多い？ 多いはちょっとよく分からないけれど？ くらいの感覚で聞いています。で、3つ目の質問まではとんとんとと行きますね。日本語にはどんな挨拶がありますか。外国語に同じ挨拶がありますか。これ、第二外国語で学んでいることを思い出してもらって、だんだん調子よく、楽しくなってくるのです。「外国語にあつて日本語にない挨拶はどんなのですか」と聞くと、アラビア語とか習っている学生が色々言ってきたり。で、4つ目です。「挨拶は何のためにするのですか」という質問をしたら、もうフリーズしてしまって、「いや、考えたことな

い、「人間たるものそれをしなければ礼儀だからダメだ」と、そんなことを言って、丁寧さを表すためとか、何か言おうとするのですけれどまだピンと来ないと言うか、そういう、何を答えたら良いのだろうということですかね。「考えたこともないし」という。学生にはいつもスマートフォンで授業中にはメールするなど、いつもうるさく言うのですが、その時ばかりはすぐ、「はい、辞書で引いて下さい」と言って、すぐにスマホで調べさせることも、後でしたのですけれども、「ああ、そういうものなんだ」みたいに、初めて挨拶とはというのを辞書で引いたというようなことがあったり。まあ、辞書を引く前に自分たちで考えなさいと言って、ああだこうだと色々言ったのですが、丁寧さを表すとか、気持ちよく過ごすためにとか、そういうことは自力では出してきました。で、ちょっとまだ混乱している状況で、このテキストの中に、本文に書かれていたところなのですけれども、例えば犯罪関連のニュースで、犯人が捕まりました、その犯人の家の近くの、近所に住んでいる人たちにインタビューしましたという時に、あの人は挨拶をよくしてくれたから、そんな悪い人じゃないと思った、というコメントが載っているのですけれども、それを紹介すると、「ああ、確かに」というふうに、「何で良い人は挨拶する、悪い人は挨拶しない、というような、そういう考え方をしているのだろう」というところにもちょっと触れると、やはり「敵意はないとか悪意はないということを示すためなのかな」という意見が出てきたり、「あなたのことを身近に感じています」という意見や、丁寧に扱いたいという意見が出てきたりします。私は特にテキストを読ませていないのですけれども、だんだんとそういう答えが出てくるようになっていきました。そんな感じで質問と答えを繰り返している感じです。

最後に、これもテキストにある文で、まとめのところに出てくるのですけれども、「日本語には形の決まった挨拶表現が豊富にあり、日常的によく用いられているのです」というふうに終わるのですけれど、ここで、「ああ、だからか」、「色々人間関係あるので、相手の領域に踏み込み過ぎてはいけないのだ」とか、あと、「あなたのことを大切に思っているよというのを表すために色々なバリエーション持って色々あるんだよ、腑に落ちた」となるかなと思ったら、全然腑に落ちませんという学生が出てきたりします。あれ、今まとめたつもりなのに全然というのがあったりして。それは、日本語日本文学科、私が教えているメインの学生なのですけれど、その人たちは「うーん、だからか」とか、「奥深いですねえ」というような、日本語が好きだったり、日本文化が良いと感じているというか、身近にすごく思っている学生たちは、「なるほど、だからこんなに便利な表現がたくさんあるんだ」というふうに捉えるのですけれど、大きい声では言えないですが、国際交流学科だとか、教育の学生は、これにすごく反発して、「何て個性がない、自分の気持ちで、オリジナルな言葉で言えば良いのに何で定型表現使うの？ これだから日本は」みたいな発想になってくるのですね、それがすごく同じ日本人でも異文化の経験ができたことが面白いと思いました。ちょっと多少学科によってタイプが違う、日本文学科の学生は何でも受け入れてしまって、「そうですね、そうですね」と言って、ちょっと寂しい、ちょっと味気ないところもあるのですけれども、他の学科からわざわざ聴講しに来ている学生たちは、結構意見があって面白いと思いました。

それから、「すみません」。「すみません」も挨拶シリーズのすぐ次の回にあったのかな、あらゆる場面で「すみません」が出てきますよねと、質問したり、色々出していきました。これもテキストに出ていたことです。「家族が迷惑をかけたときに代理で詫言いますよね、それから過去の過ちみたいなものを、後日また会った時に「先日はすみませんでした」と言いますよね」ということ。これはテキストに書かれているのですが、「こういうのって外国では言わないのですよね」と言ったら、「えっ!」というような反応がありまして、日本であるものは外国でもあるものだと思っていたというような反応が結構あって、「日

本人がこれ、丁寧だと思ってやっちゃうと、外国ではキョトンとされてしまうような、変な習慣というか、部分だったりしますよ」というような事を言っています。それから「すみません」は詫げる以外にも結構使いますよね」と出してもらったり、あと語源ですね、こういうことが学生はすごく好きです。文学部の学生なので、「すまないって、そっちなの」という反応をします。それからこれが一番のキモなのですけども、「相手との円滑な関係維持を調節する機能なんだよ」と言ってもそんなにピンとこなかったのですね。「うーん、何かピンときてないけれど次行きます」ということで、また質問を矢継ぎ早にするのですけれど、「じゃあ、現代では昔ほど「すみません」が聞かれなくなってきたと、そこへ書かれていることなのですけど、あなたはどう思いますか？ あなた自身はどうですか？」というふうに、質問をちょっと切り替えてしてみたところ、「いや、昔を知らないのだから分かりません」とまず言われるのですね。だから昔っていう言葉を使えるほど自分はまだ生きていないから分からないとそこで言われてしまって、「ああ、分かった、分かった」ということで。「じゃあ、自分はいつ使うのですか？」と。友達としゃべる時にはまず使わない。だから「使わない」となってしまうのですね。「うーん、と。じゃあ、そうすると誰かが、ちょっとしたことで、ちょっと謝ってほしいな」という時に、ちょっとしたことに何と言うのか、「一言言ってよ」、「謝ってよ」という気持ちになることがある、だから、自分の発話は分からない、振り返れないけれど、言われなくて不満に思う経験は結構出てくるのですよね。特に知らない人や後輩とかに。「今のちょっと、すみませんって一言ないの?」というようなことはしょっちゅう思う、自分のことはさておき。そういう振り返りをするのもあったので、それも面白いかなと思ひまして、すかさずそこで、「今のが相手との円滑な関係維持のコミュニケーションのあれだったのだよ」と、「それで分かったかな」というふうな確認をしたりして、何か質問も行ったり来たりしながら、私が思ったようには進まず、先にこっちをやったらこっちが腑に落ちるといような、話題も中にはありました。

最後に、「依頼のEメール」ですね。メールなので学生にもなじみがあるトピックかなと思ったのです。依頼はちょっと難しいかもしれないと最初は思っていたのですけれど、これが、「そもそもEメール使いませんし」というふうになってしまうのですね、今はLINEですから。学部2年生、3年生だと、先生とEメールすることもないから、書き方なんてよく分かりませんが、なんていうふうな、そういう人達を相手にやらなければいけない状態で、ちょっと読み間違えたなと思ひましたが、「いいや」と思ってやりました。私は大好きなのですが、この教材は外国語のEメールの書き方の直訳版も付いていて、すごく面白くて、それを全部印刷して、さあ、あなたのグループは何々語、あなたのグループは何々語、分析始め、みたいな感じで、日本語と分析、対照させながら、分かったことをとにかく書くという作業をしました。すごく面白くて、「日本語でこんな言い方をすると失礼になるなあ」、「外国語ではこんなに直接言わないと通じないのか」、「英語母語話者の友達が日本語で失礼な事をすごく言うてくるのだけど、英語では普通だったのか」、そういうことが経験として振り返ることができた。最後に、日本語でお題に沿ったEメールを書いてもらうのですけれど、なかなか上手く書けないという落ちがあって、「書きっぱなしではなくグループでシェアして下さい、誰のものが一番よさそうですか」というところまでやってみると、4年生は就活しているので、4年生が一番上手に決まっています、2年生と3年生はまだグダグダで、「これではまずいよ」と言われて、「何かそこでまた勉強になった」といようなことがありました。

今後、試してみたいこととしては、今、本当に私が好き勝手に、この授業の後に、このアクティブラーニング入れちゃおうと、私が勝手に組み込んでしまっていて、授業のテキストでタスクだとか、そういうものをすっ飛ばして、全部使いたいところだけを使っているという形なので、今後、発展タスクを活用し

て、発表の形式まで持っていきたいです。またトピックに関連することをもっと深めて、グループまたは個人で深めて色々な形で発表させてみたいです。あと、今、言語に関わることばかりやったので、言語以外の部分を使ってみたい、それから日本人学生と留学生、半々までいなくてもミックスのクラスでやってみたいと思いました。発表は以上になります。ありがとうございました。

【坂本先生】前の留学生に対する教科書としてずっと使うというのとは違う使い方ができるというのは、本当に私たちにとっても有難いことで、色々な使い方をして下さるのは本当に嬉しいことだと思っています。

【質問者】今の大学生たちは、絶対にメールはもう使わないのですよね。大学生なんかは、普通は自分が何かを希望したい時にはキタハラ先生にメールで書くようにというように、出回っているようで、一週間くらい見ないみたいです、メールを。ブラジルでは WhatsApp、またはツイッターとか。LINE は使う人が少ないから、WhatsApp なんですけど、そちらはよくチェックして見えています。メールは一週間以上見なかったです。改訂版はどうなっていくのか。先生にメールを送るなんてとても失礼なことだと思っていたのです。今は、何かを依頼する時にはメールを使わないといけないというのが今のジェネレーションなので、ずいぶん時代は変わったなと思います。

【清水先生】変わりつつあって、でも、私 E メール使いませんという学生たちがいっぱいいたのですけれども、でも時代は変わってきているとは言っても、4年生になって卒論の指導を受ける時に、やっぱり多くの先生はメールのやり取り、アポイントメント取って、メールで送受信したりしますし、あと、就活の時にもやはりメールも使いますし、そういうことを4年生は習っているので、「ああ、分かる、分かる」となるのですけれど、2、3年生はまだまだ全然。「誰々先生へ」とか、そういうことも書かずに添付の資料だけを送ってくるとか、スパムメールに入っちゃうとか、普通にありますね、留学生だけではないのだなど。

【坂本先生】確かにありますね。何もなくて、題もなくて、宛先もなくて、添付だけついているという、何か怖いですね。時代が変わってきているので、まあ、色々なことが難しい時代になってきたのですけれども。どうもありがとうございました。

それでは、貴重なお時間をいただいております。私は、埼玉県立川越高等学校というところで教頭をしております、内田正俊と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。高校生に、というお話で、坂本先生からお話があったのですが、教頭になってから、レギュラーで授業を持つ機会がありませんので、もちろん、本校は、この後お話しすけれども、受験生が多く、例年国公立大学に90名位は入っておりますので、小論文ですとか、記述の答案にニーズが大きいということもあって、生徒を個々に呼んで、私も元々国語の教員ですので、小論文とか作文とかということをやらずと指導をしてきていますし、現に今日もやっているのです。そういう訳で、色々、個人的に生徒とやり取りをずっとやってきたのですが、その中で、この、今日の、このテキストが、「ひょっとするとこれ使えるかな」と思うところがあって、そんなきっかけもあって使ってみたというような報告をさせていただきたいと思っております。

埼玉県の川越高等学校は、埼玉県の川崎市というところにあるのですが、今年創立120周年になる公立の男子校です。公立高校で、男子校というのは全国的にも非常に珍しいと思うのですが、先ほどちょっと写真を見ていただきましたけれども、本校、水泳部という部活動があって、それが毎年文化祭で出し物を出すのですが、それが2001年に「ウォーターボーイズ」という映画になったことがあって、そんなことで、男子のシンクロで評判にさせていただいて、そこに勤めているというだけで、全国の方から「ああ、川越高校ってすごい、そういう学校なんですね」と言ってもらえるようになりました。今年1月にこの東京外国語大学と高大連携の協定をということで、先日校長と私とで立石学長先生とお目にかかって、連携の調印をさせていただきました。本校からは東京外大、大体例年5名から6名位ですかね、進学しています。今日も「こういう話があるよ」と言ったら、本校の卒業生で、外語大の今度4年生になるカミヤマ君と一緒に応援に来てくれております。

この『29の方法』の活用ということなのですが、最終的な目標としては、小論文の演習、その入口として、課題文の要旨をまとめるという練習にこの『29の方法』を使ってみようと思えました。お手元にハンドアウトを差し上げてあるのですが、字が小さくて申し訳ないのですが、東大の2000年度入試問題、ちょっと古いのですが、それと慶應の2015年度の小論文の入試問題、一つずつつけてあります。これを目標として、今回ご紹介するのは、「米からコメへ」が『29の方法』の中にお話が出てきますけれども、それを入口として使ってみようと思ひ、始めたということです。何でこの二つが目標なのかと言うと、実は、元々、小論文と作文についてということで、説明をするのですが、高校では年に何回か、例えば部活動の大会シーズンですとか、そういうようなことで、自習することがあります。一日で例えば6時間授業をやっておりますけれども、3時間とか、急きょ教員が引率に出ておりますので、自習が続くことになるのです。昔の生徒は自習が続くと喜んだのですが、今の生徒は、そういう生徒ばかりではないのですが、自習になると、これはおかしいのではないかと、そういう不満も聞こえてくる。であれば、「じゃあ私が授業をやる」と言って、ただ、そういう状況でありますので、一話完結、一回完結ということで取り組んでおります。例えば、芸術ですと2時間続きの授業を組んでおりますが、2時間とも同時に自習になってしまうとこれはマズイだろうと思ひ、じゃあ、2時間完結で私が小論文か何かについて話をすることによって、去年、今年と何回かやる機会があったのです。その時に、この『29の方法』を使ってみたところ、割合、私も手ごたえがあったし、生徒にも評判が割とよかったので、じゃあ、3年

生対象に、本当にちょっと使ってみようということになりました。本校では、ちょうどセンター試験が終わってから2次試験の間までに、特編授業という時間割を組んでいるのですが、そこに国語の教員も混ざって、一般的には国語の教員は、小論文の授業は結構時間がかかる、何十人も相手にできないということもあって、どちらかというとあまりやりたがらない事情もあって、じゃあその部分、私がやりましようということで何回か授業を実際にやってみました。例えば、稲作のお話がテキストの中に出てまいりますけれど、自然に対して稲作を営んできた、あるいは、学校給食というのが極めて政治的で、アメリカの世界戦略に関わっているというような内容が出てまいります。それから、入試の問題の方を見ていただくと分かると思うのですが、例えば、生物の多様性というテーマ。たまたま慶應に行きたいと言う生徒が立て込んでいて、慶應が一番、小論文の問題としては、結構川越高校の生徒には荷の重い課題を出してくるということがあるので、使ってみようと思いました。それから、東京大学の方は、逆に、問題としては、文系理系共通の国語の一問目の問題なので、そんなに問題としては難しい問題とは思わないのですが、やはり相手が東京大学ということになると、生徒の方がおののいてですね、もう問題を見ただけで恐れをなしてしまうところもあって、それらを使う橋渡しとして、この『29の方法』が使えるのではないかと考えたのです。

そういうことで、最終的な目標は小論文を書かせるということになる訳ですが、『29の方法』を活用するというので、今のところを使うとすれば、例えば農業と後継者のこと、それから里山の保存のこと、それからフェアトレード、まあ、世界に広げていけばフェアトレードという、そういう個々のことは生徒もそれなりに知識はあるのですが、それが、じゃあ自分がこれから書かなければいけない小論文のテーマと繋がってくるかということ、そういうことには必ずしもなっていない。あるいは、「過疎の地」で快適に暮らす。先ほど、埼玉県川越市というお話をいたしましたけれども、埼玉県は、県としてはそんなに広いところではないのですが、東京に極めて近い、極めて都市化したところがある一方、ご存じの方も多と思いますけれども、例えば70年代に開発されたニュータウンが、今、年齢がどんどん上がって、かなり町として存続が厳しいところもあり、更に農業を始めとしたそういう後継者の問題とか、色々なことがあって、過疎に悩んでいる地域もある、そういう県なのですね。これは実は、埼玉県川越市という一つの単独の市を考えても、そういう構造を持っていて、川越市は、おかげさまで700万人もの観光客の方がおいでいただくような蔵の町とか、あるいはそんなこと言われて、観光客がたくさんおいでになって下さるのですが、その川越市、同じ市内でも郊外になってまいりますと、サツマイモでおなじみですが、やはり農業を中心とした後継者問題ですとか、あるいは、都市型農業とか、そういうような問題が当然出てまいります。そんなこともあるので、法学部であれば、元々生物多様性というのがテーマにはなるのですが、でも、今お話したようなことを考えれば、例えば、客が減少し続けるローカル鉄道をどう保存するかとか、なくなることは、そうなって欲しくはないけれども、じゃあ日頃乗って利用するのかということ、決してそうではない。ローカル鉄道、どこの地域でもそうですけれども、主たる顧客は高校生ですよ。その高校生が、要するにだんだん減ってくるということも側面としてある。それから川越の歴史的な街並みを保存ということで、川越は観光地ということですが、ある意味、こういう歴史的な街並みを背景にして、美味しいものを食べるという、食べ歩き観光になっている部分があるような気がするのです。でも、その歴史的な街並みを保存するというのは、観光客のレベルとは違うところで、そこで生活するというのを考えた時には、非常に、建物を維持管理していくというには足かせもありますし、それから、様々な不便もあるのですが、でも、観光客の方々に取ってはそういうことはあまり

問題にならない。あるいは、川越の町の中心街には、そうですね、生活をするためのインフラというのですか、スーパーマーケットを初めとした、まあ、京都あたりだとそうかもしれないですけど、そのような、観光客向けの施設はたくさんあるのですけれど、そういうインフラがないとか。そういうところまで気づいて欲しいということもあって、それらにはこのテキストに書かれている様々な内容が小論文の引き出しというか、テーマに直結できるようなものになっている。先ほど、坂本先生がたくさんのことを2千字に盛り込んだ関係で、非常に難しくなったとおっしゃいましたが、私たちにとっては、小論文ということテーマにして生徒に指導しようと考えた時には、これが非常に有難いわけです。そんな使い方をしています。

じゃあ、生徒が具体的にどんなことを書いてきたのかを見るため、今日は生徒が書いたプリントをコピーしたものをいっぱい持ってきたのですが、先ほどお話を伺っていて、そういえば生徒に使うという話は、確かに口頭では、「使わせてもらうよ」と言ったのですけれど、許可を取ったとかそういうことはないし、皆さんに見ていただきたいのは山々なのですが、名前もそのまま書いてあるためちょっと回しちゃうわけにもなかなかいかないので、ここにお伝えしたものでお許しをいただきたいです。例えば、「日本社会、日本農業として「米」という象徴の立場は揺るぎつつある」ということを書いてくるのです。

「米」という象徴の立場、何ですか、それ」と言う。要するに、この程度なのですね。あるいは、「食生活の欧化により」とか、これは例の給食の話を書き踏まえて書いているのですけれど、それからその次も、「米は日本人の主食の一つであるだけでなく、江戸時代や明治の頃には税金としての機能をも持つ、人々の生活に欠かせないものであった」とか生徒は書いてくるわけです。本文をお読みいただいている方はお分かりいただけると思いますが、捉え方は違いますよね。江戸時代や明治の頃には税金としての機能をも持つ、なんていうことは書かれていなかった。要するに、そういう捉え方をしているのです。例えばですけど、棚田という話が出てまいりますけれど、その棚田というのは自然なんだというふうに、そのままだと捉えているみたいなのです。私たち、昭和時代の原風景ではあるかもしれないし、自然を使って棚田が作られている、人為的に棚田が作られて、それによって農業が営まれてきた、これはその通りだと思いますけれども、棚田＝自然というのはおかしい。それから、高校では国語で共通の教材として、羅生門という芥川龍之介の作品を読むことがあるのですけれど、「下人は暇を出された」という表現がありますけれど、「暇というのは、休暇を取ったのですか」と本気で生徒は聞くわけです。休暇を取ったのでは、羅生門のような雨やみの中で下人が、死人の髪の毛を抜くというようなああいう話には繋がっていかないと思うのです。そういう捉え方をしているというか、そういう自分なりの言葉の捉え方をしているというのですかね。同じことを言うと、老婆が下人を肉食鳥のような鋭い目を見たという表現があるので、肉食鳥のようなという、生徒の知らない表現はないのと同じという言い方が良いのかどうか分かりませんが、要するに鋭い目を見たのねという理解をするだけということがあるように思うのです。

『29の方法』の「障害者とりテラシー」というページがありましたけれど、例えば社会福祉学と障害学という2つのキーワードが出ていますが、これを完全に逆に捉えているところが、実はここにあるファイルの中にいくつも出てくるのです。その結果、本文質問の4、テキストの107ページにある、「漢字表記をあたりまえとする感覚自体が、実は無自覚に「鎖国」的ですよ」と、この「鎖国」的とはどういう意味ですか」というのがある。実際に本校の生徒にやらせてみると、こんな答えがある。こんな答えを真面目に書いているのです。ただ、実際には、鎖国的という、そういう考え方を聞いているわけですから、例えば日本語の利用がとても難しい、または来日外国人や障害者を受け入れる体制が整っていないとい

うレベルではなくて、下に後から出しました、大きい字で書いた答えも、これも生徒の答えです。要するに一つの教室の中に、きちっと読み取れている子と、それからどうも、自己流の捉え方、自己流の言葉の捉え方をしている者というのが、やはり私どもの高校でもそれなりの数がいるようで、それがほぼ確実に大学生となって、それも世の中でそれなりに評判の高い大学に進学しています。そんなこともあるので、今お話しした『29の方法』と、それから小論文の実際の問題、これを読んだ生徒の答案、それを見ながらテキスト同士をキャッチボールさせるというのですか、私とのキャッチボールはもちろんなのですが、小論文を書いてみて、また『29の方法』に戻すということをしています。実は私、手元に『29の方法』のテキストを何冊か用意して、文章の内容によっては生徒にその本を貸して、このテキストのところを、自分でじゃあ写してきなさいよ、要約ではなく写しなさい、なんていうことをやっているのです。それをやるとさすがに、この文章の良いところというのは、ちょっと後でお話をしたいと思います。あるいは生徒が陥りやすい書き方としては、例えば、「こうでもあるが、ああでもある」という書き方をすることです。これ、全部実際の生徒の答案です。「一部賛成するが、一部には反論もある」ということを書いてあるのですけれど、その一部というのは一体どこを指しているのかということ、本人も多分意識していないし分かっていない。あるいは、外見的には相反する方向を向いている。しかし、これらは対立どころか同じ庭に生えた同種のだと。本人は、カッコ良いコメントをしたつもりでいるのですけれど、実際には、小論文である以上、やはり、ある限定をした上でその限定に対してコメントするというのが、やはり最低限必要だろうと思うのです。自分を縛っていたものから解放されるということで、対立どころか同じ庭に生えた木であるという、そういう話なら分かる。私にも分かります。分かるのですけれども、こんな書き方になってしまう。それも、本人が気づいていないから、そういうことになっているよと、意識的にキャッチボールしてやらないと、どうも気づかないようなのですね。

更には、例えば事実と価値判断を混ぜて、いじめがあるということを言っているだけの文章を読んでいて、いじめが存在すると言っているだけなのに、もう彼らは、いじめというのは悪いことなのだ、いじめは止めさせなければいけないだと思いで書いてあると思いで入ってしまう。という意味で、事実と価値判断を混ぜるという表現が、割合見られる感じがするのです。要するに、自分が感じているのか、あるいは筆者が感じていると書いてあるのかということ、これを区別してくれないということですね。そういうことで、この『29の方法』、このテキストの使いやすさと言えば、内容のレベルが極めて高いのですが、その中で、先ほど「肉食鳥のような」というお話をしましたけれども、そういう文学的な喩えがほとんどないこと、私にとって非常に使いやすいのはこの点ですね。それから、冒頭に書かれている「キーワード」の存在。それから、繰り返し申し上げますけれども、小論文のたねとして、自分の話題というかテーマになり得る、引き出しを貯めていくことができるということ。それから、スキミングの読みができるという意味で、項目による部分もあるかもしれないのですけれど、パラグラフィティングが大学に入ってから割合主流というか、その力がないといけないというふうになっている訳ですけど、そういう編集方針になっているということがあるように思うのです。ということで、小論文の実践をさせながら、『29の方法』にまた戻って書き写しをしたり、要約をしたり、また論文の方に戻っていくという、そういうことをしております。今一つのテーマを基に小論文ということで、実際に字を小さくして申し訳ないのですが、イメージだけ、雰囲気だけつかんでいただければと思ひまして持ってまいりましたけれども、例えば立教大学を考えている生徒がいたので、じゃあ、それでやはり同じことができるテキストはないかなと思って、そういう目で読んでいくと、この「文化本質主義」という問題に対して、例えば「翻訳文化と日本

語」という、これ使えるな、広げていけるなと思ひ、今と同じような使い方をする。あるいは、京都府立大の公共政策学部『老いの空白』という鷺田清一の文章を使った小論文があるのですが、これは「障害者とリテラシー」というのが、要するに、日本における障害者の、さっきちょっと生徒の答案で紹介しましたけれども、そういったようなことが老いの問題と正に通じるというか、引き出しになり得るというような、そんな使い方ができるかと思ひ、やってきました。元々スタートとして、新井紀子さんという数学者の『AI vs.教科書が読めない子どもたち』という本を読んで、中高生のかなり多くの部分が、実際に本が読めていない、教科書を読めていない、そういうレベルだというお話が話題になりましたけれども、私の問題意識も、それを読んで、普段から小論文の授業や小論文の個人指導をしておりますけれども、その中で、確かに、先ほど縷々お話してきましたこんな読み取り方をして、こんな書きをしているということがスタートになっている。そこに、坂本先生から『29の方法』という本をご紹介いただいて、こんな形で活用しているということの一端をご紹介申し上げました。お時間がなくなりました。またどうぞ今後とも宜しくお願ひしたいと思ひます。以上です。

【坂本先生】 どうもありがとうございます。今までとはちょっと違ひ、内容にフォーカスした使い方ということで、すごく参考になるというか、ああ、本当に感激ですね、私たちとしては。

赤門会日本語学校の池辺亜由美と申します。本日は午前中の授業の休みが取れず、途中から参加することになり、大変失礼いたしました。本日は日本語学校の上級クラスで、こちらのテキストを使わせていただいて、実際にどのように授業を行ったのかという実践例の方をご紹介しますと思います。

本発表の構成ですが、まず、授業の概要、そして内容、テキスト使用後の振り返り、そして最後にまとめをお話したいと思います。

それでは授業の概要からご説明します。まず、実施期間と学習者についてなのですが、実際にこのテキストを使用して授業を行ったのが、今から2年前になりまして、卒業前の2016年10月から2017年3月まで、約半年間行いました。授業は、1コマ45分で1日2コマ、1週間に10コマの授業を取りました。長期休みがありましたので、実際に学習したのは19週間となります。この時間では、全部の課を学習するのは不可能なので、ちょっと課を抜粋して授業を行いました。学習者のレベルですが、上級で、一番上の2クラスとなります。ご存じのように、日本語学校では、最長2年間在籍することができますが、この年は、1年目に能力試験のN1に合格して2年目を迎えた学生が多かったので、今までよりはレベルが高い学生が集まっていました。通常使っている上級のテキストは9月で終わってしまいますので、その後こちらのテキストを使わせていただきました。ただ、それ以降、そこまでレベルが高い学生が集まるクラスは作れなかったのが、結局使用したのがこの年一回だけになります。

続きまして、卒業前の上級クラスの問題点と目標についてお話したいと思います。実際、日本の高校でも同じだと思うのですが、日本企業への就職を目指す人は増えているのですが、圧倒的に日本の大学や大学院への進学を希望する学習者が多いです。そうしますと、11月に留学試験、12月に能力試験がありますので、受験の真っ最中という時期になりまして、どうしても10月期は試験で高得点を取るための授業を目指しがちになってしまいます。もちろん試験対策としての問題練習に時間を取られますし、学習者の方でも気持ちに余裕がないので、どうしても、授業も実際に調べて発表するという授業よりは、やっぱり試験の問題練習、そして自分の生活、私生活の方でも時間的に余裕がなく、面接練習や志望理由書の作成等に時間をかけがちなので、どうしても授業が試験対策という要素が強くなります。そして、1月期になると、試験は終わるので、まだ大学、大学院の受験は続きますし、就職が決まらない学生もいますので、学校の勉強には身が入らないというのが問題点として毎年挙げられます。彼らの中では、試験で高得点を取ること、合格することというのがどうしても勉強のゴールになってしまい、進学後にどんな勉強をするのか、そして大学、大学院進学後にどんな能力が必要なのかというイメージができないためにそういう傾向になるのではないかと考えました。そこで、能力試験に既に合格している人、合格の見込みがある人がほとんどなので、能力試験対策の時間を減らして、少しでも進学後の授業をイメージできるようにすると、学習者の意識も変わってくるのではないかと考えました。この半年間の目標としては主に2点で、まず、進学後のテキストに対応できるように、少しでも専門的な文章を読んで、知識を増やして、視野を広げること。そして、受け身でただ話を聞くだけでなく、自分たちで考えて読んで、意見を交わして、そして発表することに慣れる、この2点を主な目標としました。今まででもいつもこういう目標を立てて授業を行ってきたのですが、こちらのテキストを使うと、より目標が明確になって、学生の意識も変わるのではないかと考えて、こちらのテキストを選ばせていただきました。

それでは次に授業の内容についてご説明したいと思います。まず、1課の流れについてご説明します。

1課にかける日数は、ほぼ1日1コマ45分で2コマ、90分学習して3日かけました。一応これが基本の時間ですけれども、全部の課では無理なのですが、小論文やグループ発表を入れた課は、4日から5日かけました。1課の流れですが、まず、前日に本文に目を通して、本文の中の語彙と「調べる」を予習してくるようにと言いました。ただ、アルバイトをしていたり、就職活動をしている学生も多いので、実際調べてくる人は少なく、結局授業中に説明が必要になりました。1日目が、まず課の動機づけとして、関連のあるニュースや資料を提示して、学生同士でまず簡単にテーマについて話し合わせました。それから、「人物・用語解説」、「調べる」など、言葉について補足の資料を提示しながら学生に説明するのですが、その前にまずは調べたことを学生に発表してもらいました。本文の精読なのですが、まず全体で音読して、留学生ですと、非漢字圏の学習者もいますので、まず漢字の読み方を確認しました。それから2人1組で、まず、ピアリーディングで読ませました。学生のピアリーディングの課題は主に2つで、まずは段落ごとに要約するように、そしてもう1つは、本文質問の答えがありますので、その答えをまとめて書くようにと指示をしました。本文質問の答えは、こちらの質問をそのまま使わせていただいているのですが、別に紙を用意して学生たちにそれを書かせました。実際本文の内容のレベルが高いので、もし難しくて分からなかったら、「2人で相談しなさい」という形で、まず教師が指示しないで学生に読ませました。2日目は、前日にペアで読ませた内容を、今度は全体で確認しました。こちらから説明というよりも、まずは、学生同士に段落ごとの要約を発表してもらいながら、ちょっと難しい表現などを説明させました。本文の質問も、実際に答えを書いていますので、そちらも発表してもらいました。読んだ後は、内容についてグループディスカッションをしたのですが、そのディスカッションの内容が、まず本文を読んで納得したことや、解釈に疑問を持ったことなど、本人たちがどう思ったのかという感想ですね、それをちょっとディスカッションさせました。そして宿題として、基本タスクと発展タスクをまず自分たちで調べてくるようにと話をしました。3日目に基本タスクと発展タスクなのですが、まず調べてきたことをグループでディスカッションさせました。この際、できるだけ多国籍になるように学生のグループ分けをしまして、出てきたものがどういうものなのか、グループごとに発表させました。ただ、やっぱり時間に追われていまして、どうしても全員がきちんと調べてくるわけではないので、一応この時間だけはスマートフォンの使用を許可して、まず調べられる時間を取って、調べてきた学生ももう一度見直しをさせてから、ディスカッションをさせました。一課の流れは以上となります。

続きまして、実際にテキストを使用して、教師の方で工夫した点についてお話したいと思います。これに関しましては、担当した教師が私を含めて3名おりまして、聞き取り調査を行いました。まず、テキストを使用する上での工夫点なのですが、当然のことなのですが、補助プリントを少し多めに利用しました。学習者が外国人の若い学生たちで、やっぱり日本の、例えば天皇制や歴史のことなど、ほとんど知りませんので、内容についての補足説明や資料はもちろん用意したのですが、少しでも関心を持ってもらえるように、ちょっと時事問題のニュースや新聞なども紹介して、身近な話題を出して興味を持たせるようにしました。次に授業を進める上での工夫と方針なのですが、工夫としましては、先ほど申し上げましたピアリーディングですね。こちらの目的は、まず学生にありがちなのですが、教師の説明をただ聞いている、もしくは聞いているふりをして休んでいるというのが目立ちますので、まずは学習者自身に読みながら考えて欲しいというのが目的でした。学生の様子を見てみると、普段は全く自分から話さない人でも、パートナーとは一生懸命話すようにして、2人で話しながら考えをまとめていく様子がとても見られて、いつもよりも積極的に取り組んでいたように感じました。そして指導上の工夫とし

て2点挙げます。まず1点目ですが、まず本文の内容はそのまま素直に受け取るのではなくて、解釈を学習者自身に考えさせて、本当にそうなのかという疑問点を持たせるようにしました。学習者の方で出てこないようでしたら、教師の方でいくつか、こういう考え方もあるのではないかと提示しながら進めていきました。2点目として、自分の国のことを調べた後のディスカッションに少し時間を取りました。盛り上がりすぎて、ただのおしゃべりになってしまう時もあったのですが、自分の考えをきちんと詳しく述べる、自分の国の状況を説明しながら意見を述べるということは、繰り返し、繰り返し行っているのでも、大分慣れてきたように感じました。

続きまして、こちらのテキストを使用して行った活動を、簡単にまとめますと、こちらの通りになります。まず、毎回行ったものがグループ毎のディスカッションで、内容が2つありまして、本文の内容についての解釈、そして後は基本と発展タスクのところですね、自分の国について特に調べたものです。ただ、本文の確認に時間がかかってしまった課は、本文の内容についてのディスカッションが十分行えないこともありました。全ての課ではないのですが、課の内容によって行ったものがいくつかあります。まず第4章のまとめ。こちらはテキストに沿ってメディアリテラシーのテーマで行いました。具体的には、新聞ですね。同じテーマでも、社説が新聞社によって意見が違いますので、新聞種類を5つ位用意して、学生たちに読ませました。それで意見の違いなどをまとめさせて、それから自分たちの意見なども話し合わせました。そして第5章のまとめとして、ディベートを行ったのですが、一応現代社会の問題なら何でも良いということで、学習者にグループでテーマを考えさせました。全部の課ではないのですが、いくつかの課ではグループで資料を提示して、前に出て来て、自分たちの国の状況などを発表するという課題をさせました。発表が難しそうなのは小論文形式にして、800字以内で自分の意見を書くような活動を行いました。こちらの学校では、クラスが3か月ごとに変わりますので、学期のまとめとして、10月期の最後にポスター発表、そして1月期の最後に個人でのプレゼンテーションを行いました。ポスター発表は、国籍を混ぜて、4人のグループを作って、大きなテーマは「日本の文化」としたのですが、それぞれ興味がある日本の文化について調べてきたことをまとめて、発表会を行いました。2クラスありましたので、もう2クラス合同で、他のクラスの学生や、教科の教師にも見に来てもらい、大分モチベーションが上がって、話すことにも慣れてきたように感じました。1月期の最後には、レジュメを作成させて、個人でプレゼンテーションをさせました。これはテキストの学んだテーマについて、自分の国や日本の状況を調べさせて、発表をしてもらいました。国で大学を卒業している学生たちは、要領よくできていたのですが、ちょっと、高校しか出てきていない人たちは、レジュメを作成したことがないので、多少レジュメの構成やまとめ方にも指導が必要でした。

では、次にテキストを使用した後の振り返りを何点かお話ししたいと思います。まず、学習者の感想について、いくつかご紹介させていただきます。こちらは、授業の最終週に、学習者にアンケートを取りまして、とてもシンプルな記述式なのですが、よかった点とマイナスに感じた点、この2つだけ、自由に書いてもらいました。人数も少なかったのでも特にデータ化はしなかったのですが、意見の多かったものだけご紹介いたします。まず、知識が増えたということと、自分の国のことを見直すきっかけになった。そして、色々な国のことを知って、何かこう考え方が変わった、新しい発見があった。そしてディスカッションをかなりして、発表の活動に時間を取ったので、発表することにも慣れた。後は、やっぱり学習者たちにとって本文が結構難しかったが、だんだん読み慣れていって、日本語のレベルが自分でも上がったというのがよかった点です。

そしてマイナスに感じた点として書かれていたのが、やっぱり多くの内容がちょっと難しかった。そして、内容にちょっと偏りがあるのではないか、もう少し色々な分野の文章が読みたかったということですね。あと、本文の質問の答えが、どうも、一応皆でまとめはしたのですが、何かこう曖昧で、自分としては納得できないものがあったというような意見もありました。内容が難しいと感じたのは、個人個人の問題なのですが、失礼な事、批判的な感想を書いた人は、逆に言うと、そのまま受け止めるのではなくて、自分たちで内容を深く読み込むということができていたのかもしれない。

次に、教師からみた学習者の取り組みと変化についてお話したいと思います。こちらは担当教師に聞き取り調査を行った上でまとめました。学習者の取り組みとしてよかった点がまず6点なのですが、抽象的な内容のテーマですが、だんだんコツが分かって読めるようになっていった。そして、小論文の構成がよくなって、意見を上手に述べるができるようになった。あとは、ほとんど話さなかった学生が、だんだんと発表の時に口を開くようになっていった。そして、自分の国のこと、色々なことに興味を持つようになった。そして大きな変化として、グループで話したり発表したりする機会が多かったので、話し方や進め方、聞き手の方を意識して、話ができるようになったというのがよかった点だと思います。

そして、マイナスというか、ちょっと物足りなかった点が2点あるのですが、やはり知識や語彙が不足していて、文章が難しく感じてしまう学生がいましたので、そういう学生にとっては、本文を読むだけで精一杯、なかなか発展的な活動に取り組むのが難しいという課もありました。そして、ポスター発表、プレゼンテーションは、教師からの評価も高く、学習者自身はとても満足感を持っていたようなのですが、内容的にはちょっとやはり物足りないものでした。日本語学校の留学生なので、受験や就職活動をしながら、どうしても発表の準備時間を確保するのが難しいというのが大きい理由だと思います。大学、大学院の入学金ですとか、進学後のことを考えて、合格した後に、逆にアルバイトを増やすという学生も多かったので、なかなか学校の時間外に取るのが難しかったのだと思います。ですから調べたことの切り貼り、もう、自分の考察まで深められたものは、ほとんどありませんでした。

次に、教師が授業を進める上での反省点ですが、用語や背景の説明に時間がかかってしまって、メインの本文を説明する時間がちょっと取れなくなってしまったというところがありました。特に、5章の天皇制や憲法のあたりがどうしても難しかったと思います。あと、日本語学校の学生は、どうしても受験や就職活動で抜けることが多いので、授業を欠席してしまうと、その学生のキャッチアップが、どうしても難しかったという反省点があります。あとは先ほどちょっと重なるのですが、日本語力が劣る学生が、批判的に読む、思考を深めるという点まで持っていくのが難しかったと思います。

そして、もし改訂版や副教材の作製する予定があるようでしたら、日本語学校の学生向けとしての要望なのですが、まず翻訳付きの本文の語彙リストが別冊としてあれば、とても有難いものになると思います。学習者が予習や復習もしやすく、ハードルを感じることなく、読解に取り組めるのではないかと思います。こちらのテキストの文章が、とても深いもので、表面的ではないので、語彙の意味が分かって、結局どういうことを言っているのかと読み取る必要があります。語彙リストがあったところで、読解力向上の妨げになるとは考えていないので、もしそれがあれば便利です。キャッチアップにも役に立つと思います。そして、背景知識や用語解説などが、やはりどうしても留学生に難しかったので、こちらでもプリントを毎回用意していたのですが、毎回プリントをバラバラと渡しますので、きちっと管理する学生はもちろん少ないのです。なくしてしまうので、また活動の時に分からなくなってしまう

うということがありました。もちろん、少し説明を入れていただいているのですけれども、基本的なことをもう少し詳細な資料などがあると、欠席した学生のキャッチアップにも役に立つと思いました。

最後に、これまで説明してきたことのまとめとして、テキストを使って成功したと感じた点、そして授業を改善したいと思った点を簡単にまとめます。まず、成功したと思った点は、学習者の取り組みと意識が変わりました。まず、自主的に読む、話すということに取り組むようになり、色々なことに興味を持つようになりました。そして、ディスカッションの時間を多くしたことにより、色々な国、考え方があるんだねというふうに考え方が変わっていき、ちゃんと聞き手の反応を気にしながら、配慮しながら話や構成を進めるということができていたと思います。そして、大学・大学院へ入ってから、あ、こういうふうな文章を読んで、調べて発表していくということが少しでもイメージができたのではないかと思います。簡単に主張を読み取るだけではなく、そこから問題意識を持つようになった学生の意識も変わっていったと思います。

そして最後ですが、改善点としましては、もちろん、教師自身がもう少し体系的に準備をして学ばなければならないと感じた点。あとは、半年という短い期間で、どうしても多くのテーマを扱いたいという思いがあったのですけれども、もう少し背景の知識をしっかりと入れること、そして能力が劣る学生のこと、あと欠席がどうしても出てしまうということを見ると、時間的にもう少し余裕を持たせた方が良かったと感じました。

発表は以上となります。データもなく、当たり前のような話ばかりですが、ちょっと特殊な状況なので、基本的なことから話をさせていただきました。最後までお聞き下さりありがとうございました。

【坂本】ありがとうございました。やはり日本語学校は大学とは色々と違った状況があって難しいと感じました。語彙リストは実は用意しているのですが、日本語だけなんです。翻訳を入れるというのはなかなか難しいことがあって、日本語だけ。日本語で、ちょっと説明を加えたというのをずいぶん前から準備して、もうアップしなくてはいけないのですけれど、ちょっとまだアップできていませんが、する予定と、あと、最初にお話はしたのですけれど、今回間に合わなかったのですけれども、ちょっと解説になるような本を今準備しています。教師用の参考書になるようなものを来年度中には必ず、来年度の前半位には出せると良いなと思っております。なかなか難しい教科書なので、少し手助けが必要だなと思っているのですけれども、ちょっとなかなか進んでいなくて申し訳ないです。

私から一つご質問したいのですけれども、質問の答えに納得がいけない学生学習者がいたというのは、それは、クラスの中でまとめた質問の答えに納得がいかなかったということになるのですか。

【池辺先生】質問によってもいくつかあったのですけれども、一応こうなのではないかとクラスでまとめた答えが、自分一人は納得がいけない、自分はこう思うという、個人的な思いが強いものです。もう少し、はっきり明確に答えを書いて欲しいというような学習者もいました。今までもう少し簡単なレベルの文章を読んで、明らかにここが答えだよという、文章から一部分抜き出せばそのまま答えになるというような訓練に慣れているので、何か分かりにくい、もっとハッキリ書いて欲しいという学習者もいたのですけれど、それはちょっと深く読み込めていないということだと思います。

【坂本】 はい、ありがとうございました。

【質問者】私は池辺先生の発表を聞いていて、ちょっと気が付いたのは、もしかしたら、5章に関しては、先生の学生さんたちは皆アジア系ですか。

【池辺先生】はい、中国の学生が大半ですね、三分の二。

【質問者】中国にとっては、この教科書の中で一番挑戦的だと思います。ブラジルの学生たちは、先生、これヤバイんじゃないかと言って、ブラジルとかラテンアメリカの国だったら、これは客観的に読めるのですよ。教師としても別に与えても何も問題はないのです。でも、アジア系の学生は、分からないふりをしているかもしれないと私は思いました。と言うのは、これは、友常先生、かなり挑戦的ですよね。ご苦労なさったと思うのですけれど、多分アメリカでこういうテキストでやっても、絶対アメリカ人からはかなり批判を受ける、アジア系は、留学生たちがそれはそういうことじゃないよと、言ってくる可能性があるテキストですよ、5章に関しては。

【回答者（友常先生）】うちの大学で教えている先生方が書いたのです。皆さんの常識に従って

【質問者】読み過ぎかもしれないのですけれど、池辺先生の学生さんたちはアジア系の学生さんが多いので、そのやりづらさはもしかしたらあるのかもしれない。

【池辺先生】はい、実はその通りです。悩みました。課を抜粋する時に悩んだのですけれど、ちょうどその頃天皇陛下のことですとか、憲法改正のことが話題になっていたもので、学習者たちに知っていてほしいという思いがあったので入れました。三分の二が中国の学生で、あと韓国の学生、台湾の学生がいますので、彼らの心情というか、それを気にして、はい、結構、使う言葉や説明する時にも、こちらも気を使いました。実際、実はちょっと逃げもあるのですが、ディスカッションはちょっとキビシイ、発表もキビシイなという課は実は小論文にして、自分たちの考えを客観的に書こうというふうに持っていました。

【質問者】5章に関しては非常に難しいと思います、使い方が。

【池辺先生】特に憲法のところが難しかったですね。

【質問者】幸徳秋水とかサラッと書かれているので、これはアジアの学生たちには結構大変だなと。ラテンアメリカの学生たちとかはコメントしていましたが。

【池辺先生】あの、実は幸徳秋水の課は、恐ろしくてスキップしてしまったのです。

【質問者】なかなか幸徳秋水は、私、結構挑戦的かなと思います。

【池辺先生】ただ、学習者たちも一応大人なので、そこで思いっきり反発してくる人もいませんでした

し、中国はこうだという話をバーツとしてくる人もいなかったもので、しつこくこういう考え方もあるよ、筆者はこういう考え方だよね、あなたたちはどう思う、できるだけ客観的に読むようにねというようにしました。

【坂本】単純に内容が難しいのですよね。私たちのクラスでやる時も5章はとにかく難しいという反応が多いです。読むのがとにかく難しいというのですよね。

【伊集院】今の関連で、「戦後レジームと日本国憲法」のところ、幸徳秋水は実は私も授業では扱ったことはありません。やっぱり憲法のところとか、あとは、2章で村上春樹の作品を紹介しているところとかも、やはりどうしても戦争の話とかが絡んでくるところで、クラスに中国、韓国の学生が必ずいますし、やっぱりこちらは何となく構えたり気を使ったりはしますけれども、これはこれでやはり読み解くということと、それについて自分はどういう意見を持つかということを中心にやっているの、何と言うのでしょうか、感情的になって何かということは特にはないのですけれども、この後のディスカッションでも多分そういうテーマになるなというところがあって、やはりこの教科書を使う時の注意点というか、工夫点というので、もう挙げて下さっているのですけれども、一つの解釈としてこういうのがあるということと、それをそのまま受け取るのではなくて、別にこれは日本人を代表する意見でも何でもなくて、一つのテキストとして読んで、それぞれがどう捉えたかとか、どういうところがおかしいと思ったかというのをお互いに言えるような。せつかく色々な国から人々が集まっているので。やはり、そこが、根底がないと、本当にこの教科書は色々な意味で難しくなっちゃうなというのを感じつつ、それを言うことによってすごく上手く、本当に多様性が生きる教科書になっているのかなというのはいずれの使い方によるところです。はい、すみません、感想です。

【池辺先生】ありがとうございます。おっしゃる通りだと思います。実は、学習者から日本人は皆こう考えていますかという質問をもらったことが。もちろん違います、これはこの文章を書いた先生の考えであって、色々な考えを持つ日本人もいますから、それは皆さんの一人一人の意見を持って良いのですよというのは強調しました。

【坂本先生】ありがとうございました。ちょっともうディスカッションに入ってしまったのですけれど、そういう発表をして下さって本当にありがとうございました。